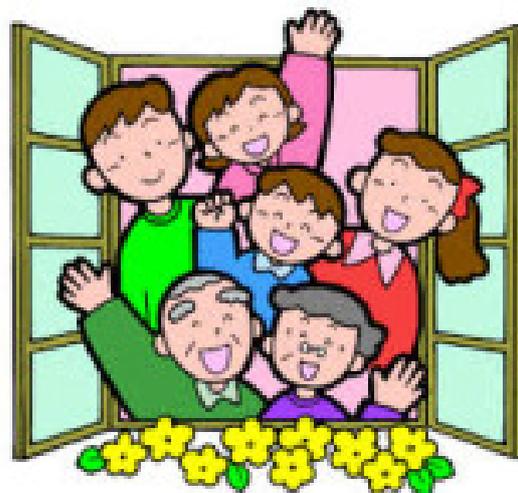


地域と協同

第2号

発行：特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター



特集

地域で人をつなぎ、未来をつくる！

| | | |
|---------|-----------------------------|---------|
| 《 講演 》 | 地域における協同の役割と課題 | ……………3 |
| | どうすれば 自分をひらくことができるか 小木曾洋司 | |
| 《 座談会 》 | | ……………10 |
| | ちょっとしたきっかけで 私をひらき 地域でつないでいく | |
| 《 報告 》 | | |
| | ①「南生協よってって横丁」 | ……………20 |
| | 南医療生活協同組合 | |
| | ②大府市横根町での移動店舗と地域交流の取り組み | ……………25 |
| | 生活協同組合コープあいち | |
| | ③「コープぎふ おたがいさま東部」設立準備状況 | ……………29 |
| | 生活協同組合コープぎふ | |
| | ④組合員参加の地域づくりについて 伊賀エリア会活動 | ……………33 |
| | 生活協同組合コープみえ | |
| | ⑤みんなでつくろう新店舗～クリアチオの挑戦～ | ……………37 |
| | 金城学院大学生生活協同組合 | |
| 《コメント》 | 5つの報告を聴いて | ……………41 |

はじめに

本号は、2月8日、第10回東海交流フォーラムが「地域で人をつなぎ、未来をつくる！」～あなたは、誰かとつながっていますか？あなたは、今、しあわせですか？～をテーマに開催され、その内容を基にまとめたものです。

《講演(p3-9)》で、小木曾先生は「人間はやはり、関係がすべてだが、孤独死や過剰適応、若者で『助けてと言えない』人たちが多くなっている。自分の能力を、体力を、感性を磨き『自分をひらく』ことが大切だ」という。現実には協同関係はかなり一杯ある。『住み開き』の『小さな公』が、事例報告の『大きな公』で協同のシステムをつくらうとする活動と、どう接合できるかどうか、こういう問題設定を皆さんにお伝えしたかった。」と話されました。その講演内容を整理していただきました。また、報告された事例について《コメント(p41-42)》も寄せていただきました。

《座談会(p10-19)》は後日、フォーラムの参加者に集まっていただき行いました。

フォーラムを振り返り、実践者の立場から、どう自分をひらくか、日頃の生協活動を通して、気づいていること、これから私たちのやれることについて、意見交換をしていただきました。

どう自分たちが地域でつながるのか、それはちょっとしたきっかけであったり、お節介であったりする。組合員が自ら声を出してやりたいことが出来るのが、協同組合であること、そして、相手が笑顔になることで自分も幸せになる、といったことが話された。それは、今回のフォーラムでの「あなたは、今、しあわせですか？」との問いかけに答える話し合いとなりました。

5つの《報告(p20-40)》は、東海交流フォーラムのテーマを深める意味で、生協が地域をどうつないでいるか、いきいきと報告された内容について、新しい状況の報告や、フォーラム当日、報告できなかった思いを加えていただき、新たに原稿を寄せていただきました。

この号が、地域での協同について深め合い、より良い社会とくらしへの一助となれば幸いです。



《講演 “地域における協同の役割と課題”》

どうすれば 自分をひらくことができるか



小木曾洋司

中京大学現代社会学部准教授・地域と協同の研究センター理事

〇はじめに

今日は、若い人をイメージして、どうやったら自分をひらくことができるかを報告します。学生を見ていて、もっと自分を自由に出して自由に関わることができるなら、いろんな事が見えてくるのではないか、と思うわけです。人間は関係があるからこそ何かに関心もち、何かを知りたくなる。それが切れていると自分のことさえわからなくなる。その状況は個人の問題でなく、社会の構造の課題だと思います。

1. なぜ今「つながり」か？

— 信頼関係の重要性

● 「孤独死」はその人が生きてきた結果

現代のつながりを考える材料になるのは、孤独死の問題です。孤独死は、看取る人がなくて亡くなっていくことです。社会学者は、孤立性という問題として設定しています。

孤独死が社会問題として認知される契機となったのは、NHKスペシャル取材班&佐々木とく子『一人誰にも看取られず』（2007年）の中の千葉県松戸市常盤平団地です。戦後開発された大規模団地です。当時は最新で、中間層が入る高嶺の花でした。若い夫婦が多く、すごく活気に満ちていましたが、それがなくなってきたのが現在

です。

常盤平団地でずっと住んでいて、自治会長をやっている中沢さんは、当時から一緒に地域の活動をしてきた仲間たちと、「この団地で孤独死が起こるなんて、そんなところではないはずだ」と感じる。なぜそう思うかという、自分たちが団地をつくってきたという思いがあり、自分たちの人生と団地が重なっているわけです。そういう意味で団地の中で孤独死が起きるのは信じがたいと同時に、孤独死をなくしたい気持ちが湧きました。そして真正面から仲間とともに孤独死に向き合いました。その決意として、通報体制に自分の携帯番号を入れることまでします。その中沢さんが言われているのは、孤独死は結果であって、結局どうその人が生きてきたかが問題なんだということです。

NHK無縁社会プロジェクト取材班『無縁社会』（文芸春秋）の本と、クローズアップ現代の取材班『助けてと言えない』という本があります。前者は孤独死に至った人の生き方の問題を追求した本で、つながりが「切れる」過程を描いていません。だんだん人間関係が貧困になって切れていく2つのケースがあります。ひとつは、戦後の標準的な生活（会社と家族）がもてない人が孤独死という状況に入っています。もうひとつは、逆に、会社（仕事）にのめり込み、女性に家庭を任せて、他律的に決められた生活の枠組みの中で過剰適応し、新しい関係や新しい生活の枠組みを、自分

◀講演▶

自身でつくる能力ができていないケースです。そのような人が突然、定年退職で、自分で自分の生活を作りなさいと言われる。会社から離れると、奥さんからもかまわれず、自分の置き場がなくなり、そのような状況で離婚すると孤独死予備軍の人生を送ってしまいます。

● 関係をつくる能力の欠如

若い人も関係をつくる能力がついていないように思います。挨拶ができないとよく聞きます。いい大学に入り、いい企業に入った人の中にも人間関係ができない人がいるそうです。だから能力はあるかもしれないが、ひとりだけでする仕事を与えられるそうです。能力という言い方をしましたが、そういう人は体がかたまっているわけです。挨拶できるというのは、挨拶をするという身体的能力がないことで、訓練してないとできない。私がここでしゃべることができるのは、日頃からしゃべっているからです。突然しゃべれなくなってしゃべれない。それと同じことで、挨拶ができないというのはその人が持っている精神文化、生活文化の内容です。使っていないものがいっぱいあるわけです。学生でもそうです。それをどう使えるようにするか、それが「自分をひらく」という言葉、どうやったらひらけるか、ということです。たとえば、生活文化という点で言いますと、昔固定電話があったときは、子どもたちの交友関係は家族に伝わったわけですが、スマホが普及した今、全然分からない。スマホは家族関係そのものを希薄化する要因だということです。しかもスマホは直接的なコミュニケーションではなく、頭のなかのコミュニケーションです。身体をつかい、直接会わないとその人を理解し、分かることはできないと思います。メールが登場した当初、大学で、先生同士のメールによるやりとりで誤解が起こり、言い合いがあったことを思い出します。それはコミュニケーションの量的な減少と共に関係性の一面化でもあります。つまり心身の使い方の変化です。

人間関係の希薄化・一面化によって若い人は自

分のことが分からなくなる、これが一番おそろしいことです。30代の「助けてと言えない」人たちが多くなるのは現代的な問題です。規制緩和による労働者の非正規化が大きな影響をもたらしています。違法だった派遣が80年代半ばに派遣法ができて合法になった。非正規は雇用者の3分の1くらいになって大きな問題です。反貧困運動の湯浅誠は、ひとつの席しかないのに3人がすわろうという構造があるにもかかわらず、そのことを理解してもらうことが難しいという趣旨のことを話しています。彼らは若く、不安はあるがなんとかなるだろうということとあわせて、自己責任論が浸透しているということです。湯浅は「がんばらなきゃいけない」じゃなくて、「彼らは一人でもがんばりすぎたんだ」という言い方をしています。その結果、社会保障にアプローチできないようなホームレスの状態に入ると述べています。（湯浅誠「反貧困」岩波新書参照）

こういうふうには、高度成長を担った人たちの中に、つながりが切れていくパターンと、若い人が参画できない、つながりがつけれないパターン、この2つが今の社会にあるということです。孤独死や若い人の生き方を見て、大切なのは直接的な社会関係をつくることなんですが、関係をつくれるような能力—考え方、体力、感性—を磨かないといけません。そういう生活文化がないならどのような機会と場所でそれ磨けるようにするか、格差社会による信頼関係の破壊はそれを困難にしていると同時に、ますますその必要性和回路の形成を課題として浮かび上がらせています。

● 格差社会が生み出す人間関係の貧困

現代的な貧困には、人間関係の貧困も含まれます。昔は少数のお金持ちと圧倒的多数の貧乏人という構造がありましたが、経済成長によって中間層ができ、豊かな社会へと移行しました。ところが1990年代以降の格差社会によって、まん中がごそっと落ちていくわけです。我々は食べるものがないわけではないですが、格差が大きくなってくと自分を他人と比較し始めます。あいつが

◀講演▶

もっているのに、私はもっていない、ということが強く意識されてくる。これが、ウイルクソンが言う、格差が社会に及ぼす一番大きな影響です。下層の人だけでなく、上にいる人もそうなる。アメリカで格差の大きな州と小さい州を比較した統計資料がウイルクソンの著書に載っています。それは高校をドロップアウトする比率ですが、格差が大きい州では低い階層だけでなく、高い階層も高校からドロップアウトしていく比率が高いのです。簡単に言うと、その社会の平等性が高いと結構幸福度は高いが、格差が大きくなって競争関係に入ると、プライドから飯は食わないでもスマホをもつという現代の貧困の形が出てきます。一点豪華主義ですが、そういうアンバランスな状況で貧困が見えなくなる。同じような服装や仕草の学生がコンパをやろうとすると、経済的に行ける学生と行けない学生がでてくる。それが原因の心のわだかまりで人間関係をつくる難しさが、現代社会の構造にはありますが見えない。だからなかなか自分のことをしゃべれないのです。

その結果、他の人間に対する感性の変容が起ってくる。フランスのパリの政治家ペリファンは「世界をおおう対人恐怖症」と表現し、次のように述べます。

「いま、現代人が抱えるもっと大きな悩み、それは人間関係だ。人種差別とか、貧困、不況—そういったものも社会問題には違いないが解決策は必ず見つけられる。むしろ対人関係に悩み、心が蝕まれることのほうが深刻だ」「お年寄りが重たい荷物を運ぼうとしている。助けてあげようと手を伸ばせば、先方から『ハンドバッグが盗まれるかも』と警戒されてしまう。子どもたちを学校に迎えに行くと、友達のこどもに『可愛いね』と頼りしようものなら『セクハラ』と訴えられる」「教会の牧師に懺悔に行っても、密室で二人になるのは禁止。幼稚園児を先生がトイレに連れて行く時も一対一ではダメ・・・」

こういう不信感が現実の生活の中でできます。それに対して彼は「隣人祭り」という住民の交流機会を普及させてコミュニケーション回路を形

成する運動を展開しています。日本にも支部ができていますが、簡単に言うと、いろんな人が集ってとにかく一緒に食べる、一緒にしゃべる。お酒のせいもありますが、一緒に食べるという行為は、まずは家族のそれですから、本当にみんなが自分を出せる雰囲気になるわけです。自分を他人に（自分自身に対しても）さらけだす（自分をひらく）場所として機能している。このように読むと、各生協が行われている、おしゃべりパーティは、まさにそのことをやっていると思うわけです。

ペリファンはパリの政治家ですが、イベントからどう協同の関係性が発展するか、第1段階から第4段階まで見ています。第1段階が出会う・知り合う親しくなる、隣人祭りのレベルです。第2段階は隣人同士のサービスの貸し借り、第3段階が相互扶助、第4段階は長期的視野の助け合いです。

2. 協同関係は一杯ある

●「住み開き」

現実には協同関係はかなりあると思います。あるがすぐ消えてしまう。できては消える状態があります。アサダワタルさんの本を紹介して解説したいと思います。『住み開き一家から始めるコミュニティ』という本です。



▲紹介された本の表紙カット—筑摩書房より

若い人たちは、外には出て行きたがらないが、人とつながりたいという志向性はでてきているのではないかとこの本を読んで思います。それを素材に、生活や地域の中に協同関係がどう出て

《講演》

きているかを見ておきます。一つは、住み方は生き方なんです。住まい方は、毎日の生活の仕方でもあります。アサダさんが書かれているので、少しだけ読ませてください。問題意識は結構似ていると思います。

「僕たちは都市に行きながら様々な空間に対して無意識に役割を与えている。ここは買物するところ、ご飯を食べるところ、仕事をするとところ、恋人とデートをするところ、友人と遊ぶところ等々・・・ここでは空間における自分の役割も無意識の下に作られ、ある時はサービスを受けるお客になり、またあるときはサービスを提供する従業員になったりする。」

こういうふうに、現代社会は、機能的に空間が区切られて、それぞれのところで自分の役割がきめられ、どうしゃべるか決められている。その中で自分たちの気持ちを出せなくなる。したい、やりたいことがあっても「ここではできない」ことが多いわけです。若い人たちが街の中でダンスをする。機能的に区切られた空間を無視するわけです。どまんなか祭りがはやる、まさに受け入れられるのは、区切られた空間を越える事ができるから、という側面があるのではないかと私は考えています。

次を読みます。

「お金に還元されない役割として、自ら社会活動を展開し、他者と他者をつなぎなおしている人たちもたくさん存在する。そういった人たちが語りあう場は、もてなす側／もてなされる側といった関係性を超えて、フラットなコミュニケーションの回路が生まれる空間となって現に存在しているのだ。」

そういう例を一杯あげています。友人たちが気軽に語りあうホームパーティから、造園プランナーによる自宅屋上造園カフェ等々、と書いてあります。

「みな様々な理由で開いているが、共通してい

る点がある、それは無理せず、自分のできる範囲で自分の好きなことをきっかけにちょっとだけ開いていること。（自宅です。）これは公共施設や商売のためのお店でなかなかできないことだ。また同時に昭和初期の地域コミュニティにあるような開きっぱなしというものとちょっと違う。とにかく私があらゆる条件の核となる。しかしただエゴでない。個人宅を開くことで小さなコミュニティが生まれ、自分の仕事や趣味が他者へと自然にかつ確実に共有されていくのだ。そこでは無論、金の縁ではなく、血縁でもなく、もはや地縁でも会社の縁でもない。それらが有機的に絡み合う『第3の縁』が結ばれるのだ。」

これを第3の縁と言っているかどうかわかりませんが、「僕はこういった活動を『住み開き』と勝手ながら名付けた」という、こういう本です。

私の問題意識と似ているところがあります。若い人がどう自分を開きつつあるか。自宅を開くことは、自分の心をひらくことです。孤独死する人は絶対開きませんから。そこへどう入っていくか、市民活動をしている人や行政は困っています。若い人たちが外にひらく気持ちや指向性を持ち始めたことに注目したいと思っています。

●「ちいさな公」と「大きな公」の協働をどう接合するか

「住み開き」は、「フラットなコミュニケーション回路の生まれる空間」を言います。「個人宅を外へ開放する空間」それを「小さな公」と言っています。協同の社会システムは「大きな公」の問題です。彼らは「小さな公」という形で自分を開いていますが、それが「大きな公」にどうつながっていきけるのか。このフォーラムの報告①～⑤は、「大きな公」のなかで協働関係をシステム化しようとする活動です。ところが、若い人たちはそのような「大きな公」の形成場所にはなかなか出ていけないが、自分のコントロールできる範囲でやり始めている。両者をどう接合できるか、こういう問題設定を皆さんにお伝えしたかったわけです。それを少し見て行きたいと思っています。

◀講演▶

アサダさんの言葉です。

「『私』が少しひらくことによる、小さな『公』の場。『住み開き』は、自分の日常生活の中に区切られてしまっている様々な役割—仕事、学業、家事、趣味—と言ったものを再編集し、人間同士の関係性を限りなくフラットに再構築する。」

ひとつの場所、そこでの関係でいろんな自分が出すことができる場のことです。私は今ここでは講師として自分を表現するしかないのですが、生活者であり、働いている人であり、デザイナーであるなど、いろんな自分が出せる、そういう場をつくらうとしているわけです。「第3の縁」と言っています。多い事例はシェアハウスです。

たとえば、面識のなかった若い独身の女性、3人がシェアハウスで住むことになり、その後、共有のリビングでパーティをしたり、展示会をしたり、というものです。昔の縁側みたいなところがあります。たとえば、おしゃべりパーティもどこでやるか考えるといいかもしれません。面白いところ、よりフラットな関係性と自己表現できる場所はどんなところか考えてもいいと思います。若者たちにこういうふうに日常生活に他者とのコミュニケーションを組み込む志向が増えていると考えられます。誰とシェアするか、私と自宅が核になり、どれくらいの期間開くか、週に一度か、月に一度か、空間的にはどこを開くか、リビングだけとか。全部開いている例もあります。実にバラエティがあります。そこで私が選んだ幾つかの事例を紹介します。

最初は、「R o j i r o o m」。「都心居住型開放生活のススメ」と書いてあります。大阪府中央区空堀商店街の脇路地の奥にある。築80年以上の古民家を再生した、自宅兼アトリエ兼ショールーム兼ショップ。ランドスケールデザイナーの方、服飾デザイナーの方のご夫妻で運営されている。2人は次のように言われていると書いてあります。

「お二人は口を揃えて『家に住んでいるという

よりこの街に住んでいるという感覚』と話す。最近お父さんが生まれたこともあり『母親としての視点で街を見る事が多くなりました』と純子さん。街で買物をしている際に、授乳やおむつ交換で困ることもあり『R o j i r o o m』に授乳コーナーを開設した。純子さん曰く、『昔の人は街をもっとつかっていたと思うんです。』」

こういう形で、自分をひらくことで、「大きな公」への関心や視点が生まれ、それに適合した自分の住まいである住居をつくりなおす、つまり住居が他者とのつながりを前提としてつくられるということもある、ということです。R o j i r o o mは「家に住んでいるというより、この街に住んでいる感覚」と書かれているような若い人の感性が開いていくプロセスを感じさせます。

次は「五月が丘まるごと展示会」です。

「広島市佐伯区五月が丘団地。造成から35年がたつ大型ニュータウンでは、2007年より毎年5月1日から3日間、自宅を開放したアート展『五月が丘まるごと展示会』が開催される。陶芸や鉄アート、絵画やアクセサリー、雑貨や洋服などなど。また音楽会や上映会も開催される。約30箇所の会場のうち大半が自宅。もちろんこの集会場や公民館がないわけではない。あえて自宅である理由は、『まるごと展示会』が団塊世代で立ち上げられたことと密接に関わっている。」

こんなことをやっているわけです。第1回に24名参加して16箇所の自宅会場で開催された、2010年の第4回は40名31箇所まで膨れ上がったと書いてあります。

「団塊世代の話につながる。そもそも「まるごと展示会」の開催意図は展示会をする事が第一の目的ではなく、自宅を開放した展示会を通して、日常的に団地内外の人たちが交流しあうところにある。」

だからやはり交流への志向はあるし、形になってきているんですね。

《講演》

「注目すべきはその活動の中心は女性であること。一般に女性は男性よりこれまで家、ひいては地域で過ごす時間が圧倒的に多かった。そしてそのことより住む地域での社会性が非常に強い。だから彼女たちの『表現の場としての家』が開放されることに意義がある。『歳をとっても、この街でずっと遊んで生きていきたい。そう思えば、“まるごと展示会”も続けられるんです』という。」

先に紹介したペリファンは、高齢者になり、一人の生活が困難になったら福祉施設に送るといのはもっとも安易な「厄介払い」ではないのか、それは嫌だと言っています。それゆえ、協同関係を紡ぐ運動を展開したわけですが、同じようにアートの展示場所として、自分の作業場である家を開いて、外への通路をつくる、あるいは外からの通路をつくる。そのことによってある意味では、地域そのものが自己表現の延長空間になり、生きる場所となり福祉の機能をもつものになっていきます。こういう考え方を、京都市中京区の社会福祉協議会は「福祉ドーム」と表現して意識的に展開しています。これも家を開放することがポイントです。展示会をやるにも公民館でなく、自分をひらく、表現するためには自宅を開くことが一番ぴったりくるのでしょう。「さつきが丘展示会」は、「年を取ってもこの街でずっと遊んで生きていきたい」から団塊世代の女性の表現の場として自宅を開く。自分の頭をつかって自分の場所で表現すること、このこと自体、高齢者の生活が、社会的コストのかかるお荷物ではなく、地域の豊かさとして展開できるということです。

最後、「優人」です。完全に開いてしまったという例です。

「京都府城陽市で活動するNPO法人『優人』。『スタッフ=家族』という体制で自宅を開放。介護の必要な高齢者や障害者、小さな子どもやひきこもりの若者を対象に、老若男女が集える場づくりを行っている。代表の大川さんのご家族は妻の佳奈子さん、長女の優子ちゃん、長男の真人君の四人。お子さんを『スタッフ』としてホームペー

ジでも紹介しているところが、職住一体の極みと言える。大川さんが介護の仕事に携わるようになったきっかけは実祖父の介護から。その後、高齢者と障害者それぞれのデイサービスセンターに計6年つとめた。仕事は楽しかったが、制約も多い福祉制度の下では、計画に則ったサービス提供をする事が義務付けられており、それ以外は禁止になる現状をまああたりになして、『今』したいことを聞けない状況に様々な疑問を感じた。『自分やったら今のありのままの自分のお願い・本音をさらけだせる所にいきたいなと思ったんです』と大川さん。また、制度によって「この人は高齢者／この人は障害者」と分けて対応することに対して違和感をぬぐえなかった。『制度(決まり)があるということは、同時に制度からもれてしまう人や対象外の人が出てきますし、また、施設での集団生活になじめない人も必ずおられます。そんな人たちが一つ屋根で共に過ごす場所が必要なのも事実であり、制度との共存が必要だと思いました』。そうした背景を踏まえ、2008年秋、誰もが快適に過ごし、集える場所として、NPOの立ち上げ～自宅開放型事業所を開設した。

現在のサービスの内容は、通いと宿泊。利用者のお大半は施設の利用からもれた、また諸事情があり施設を利用できなかった高齢者です。ここでのルールはほとんどなしで、とにかく利用者にとってやりたいことをやりたい時に自由にできる場を心がけている。改めてこの場所が自宅であることのメリットを伺ってみました。「やっぱり家という空間は利用者も“素”の自分を出しやすいと思うんですね。それに介護する側も施設ではどこか“ヘルパーキャラ”を演じていたんですが、ここだとプライベートと地続きなので“素”でいられるし、常に“素”の自分で接したいという思いがあります』という大川さん。」

自宅の「小さな公」の中に「大きな公」を導き入れて開いていく事例です。閉じた自宅から「大きな公」へ入っていくとどうしても制度の枠内でしか動けない、それを克服する方法として自宅という場を使う方法です。自宅が事務所で家族がスタッフになっています。制度福祉においては、介護する側、される側という関係を越えることができない。そこでは高齢者にとっても障害者にとっても自分をさらけだせない。制度としての規則という枠があり、それ以上やってはいけない(要求

《講演》

しても無理)となると、自分を出さないんです、学生もそうです、やってはいけないとなっていると自己抑制をしてしまう。規則に合わせて振る舞い、自分を出さない。ケアする側も“ヘルパーキャラ”を演じていることが分かってきます。これを読んでいると、家族とはなにか、福祉施設は何か、もう一度、考えなおさざるを得ないように思います。

●若い人の協同関係への志向性の行方

私は以上のような「住み開き」について「自宅という私的所有空間で自由を確保し、そこで公を担う方法である」と言いました。制度に制約されるのではなく、制度を利用することができる形を求めたのではないか。本来公共性を担ってきた地縁関係を、自己表現としての協同関係と活動が形成していく過程であろうと思います。アサダの表

現に従えば地域社会は「大きな公」。そこへの着地はなるか、というのが大きな今後の課題になります。この協同関係を社会サービスの供給システムとして構造化しようとするのが「新しい公共」、「ガバナンス」、「コミュニティの再生」など言われているものです。政策的にはそのような方向が打ち出されてきています。

いずれにしろ、若い人たちは、他人に対する志向性として自分＝自宅を徐々に開き始めています。「大きな公」として皆さんのやっている協働の活動、「外」でやっている活動に、自宅を拠点に「私」少しずつ開いている若い人たちの動きが今後どのように接続できるのか、それを、今からの報告の中で考えていきたいと思っています。



2月8日
第10回
東海交流フォーラム
より



▲講演、報告



▲講演、報告を受け、分散会で交流



▲参加者より感想交流

《座談会》

ちょっとしたきっかけで 私をひらき 地域でつないでいく

出席者 渡部千早登 生活協同組合コープあいち・理事
増田 美紀 南医療生協・非常勤常務理事
田代 恵理 金城学院大学生協・学生委員
向井 忍 研究センター・専務理事
司会 吉田 法子 フォーラム実行委員・コープみえ理事



第10回東海交流フォーラムに参加された方たちに集まっていただき、フォーラムをふりかえって、感じたこと、その後の自分自身について語っていただきました（編集委員会）。

吉田：座談会の司会をします、吉田です。今日の座談会では、2月8日のフォーラムに参加されて感じたり、気づいたり、その後行動されたことをみなさん自身のことばで語っていただきたいと思います。基調講演された小木曾洋司先生は、自分を開くことが大事であり、自分を開く『小さな公』が、生協のような『大きな公』で協同のシステムをつくる活動とどうつながるか問題提起されました。この座談会でも自分を開きながら、一緒に有意義な交流を深めていけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

● 座談会への思い

渡部：渡部千早登です。住まいは名古屋市天白区です。コープあいちの理事をして、この6月で2年になります。今回は、自分なりに右往左往しながらこの2年間考えやってきたこと、理事会の論議に参加しながら自分なりに考えたことをお話しできればと考えています。

増田：実は「地域と協同」第1号に、うちの娘が載っているんです。昨年フォーラムで子育ての発表をした福田翔子が私の娘で、一緒に写っているのが孫です。このあと一人生まれて2児の母になりました。私自身はこういう場での発表は初めての経験でした。雪の降る寒い日でしたが、若

い人の発表もあり、すごく新鮮でした。南医療生協も高齢化で若い方と多世代の交流をどうしていくのか課題になり、今年度の総代会の議題にもなっていて、お知恵を聞かせて頂きたいと思いません。



▲増田 美紀さん

田代：大学3年生で、国際情報学科に所属しています。フォーラムには、金城学院大学生協の発表をした藤井千明先輩の話をしっかり聞いて、後輩にその思いを伝えたいという目的で参加しましたが、大学生が全然なくてびっくりしました。緊張していたけれど、グループ交流したときに、すごく真剣に聞いていただき、話す人の意見を尊重して話し合う機会があるのはすごいなと思いました。今日もうまく話せるかわかりませんが、思ったことを伝えられたらと思います。

向井：フォーラム実行委員会で話し合ってきたことが、内容に反映できたフォーラムでした。そ

《座談会》

それぞれの生協の地域のつながりが、当日のみなさんの発表を通して一人ひとり参加された方に伝わっていると思いました。小木曾先生が冒頭で一人ひとりが開くことと、生協が地域で大きな問題で取り組んでいることをつながり問題を提起されましたが、その接点は十分にあると思いました。今日は、フォーラムでテーマにしたことが、参加した一人ひとりの気持ちやその後どのように表れたかを知りたいという思いで、座談会に参加させていただきます。

震災で愛知県に避難している人を支援する愛知県被災者支援センターにかかわっていますので、個々の人の気持ちを受け止め、一人ひとりの生活が社会の中でどうすすんでいけるか、フォーラムでは日常生活の問題でしたが災害時の事例を紹介させて頂き、考えあいたいと思います。

●あえて お節介お婆さん

自分から声をかけること

吉田：一人ひとりが自分を開くこと、組織の中でもそういう問題を考えることがあると思います。

渡部さんは、理事として参加しているいろいろ考えてきたと言われましたが、少し詳しく紹介していただけますか。



▲司会：吉田法子さん

渡部：自分を開くということが小木曾先生の話にありました。よく、心を開くということを聞きますが、今は他人との距離が近くないので、隣の人が何をしているか、どんな人か分からない。人間同士のつながりがなくなって、地域生協でい

ば個人宅配が多く、担当者も会えないなど、どうするか、理事会でも話題になります。担当者も工夫して努力してメモを残したり、会える時は話したりとか。社会の大きな問題として、自分を開くとか、地域で自分が何をできるか、すごく大きな課題だと思っています。

私自身も個人宅配をやっている、配達で居る時は担当者と話しをしますが、宅配をやっている人の中には居てもピンポンしないでくださいというおうちもあつたり、商品はほしいけど、担当者と話はしなくてもいいよ（笑い）という人もあつたりするそうです。そこを無理矢理とはいかないので、そういう人に生協のよさを伝えられたらいいなど、なかなか難しいことですが、いつも思っています。

私自身のことを考えると、地域で生協の理事としてやっていることで、地域の中でどういうふうにつながれるといいか、考える視点が変わったことが大きいと思っています。自分が住んでいる地域で、一人ひとりの顔を浮かべながら、この人はこういう人だ、この役をやっている方、ここでお会いする方、顔を合わすたびに、地域の人に興味を持ち、地域の人に目がいくようになりました。もう一歩地域の中で生協としてどういうふうにつながれるか、少しずつ実践していかないといけないと思っています。

吉田：担当者と話したくないというところで笑いが出ましたが、医療生協でも、つながりたい人とつながりたくない人がおられるのでしょうか。

増田：つながりたくない方もあるでしょうが、そこはあえて私たちはお節介お婆さんになりましょう。（**田代：**エーッ！）**増田：**今年のフォーラムでもうちの常務理事の安井さんが発表され、うっとうしがられてもあえてお節介お婆さんになりましょう、と言われていますが、私自身もそういうお婆さんをめざしたいと思います。医療現場でも、やはり個人情報壁があって、この患者さんは今受診されているが退院後のことの心配があって「ささえあいシート」があり、医療や介護の現場から、その人が家に帰ってから心配だから、地域の組合員さんに少し様子を見てほしい

《座談会》

と発信しています。個人情報保護から医療現場でもそんなことを地域に発信していいか、今も迷いがありますが、それはあえてすすめて行きましょう、と少しずつ広げている最中です。

吉田：若い田代さんから、エーッ、すごいという声があがりましたが。

田代：どちらかというと、私もお節介してしまう方ですが、どこまでやっていいかわからないので、それを自分から言えるのはすごいなと思います。私はこうしたいけど、どこまでお話ししたり、伝えたりしていいのかわからない。学生委員の活動を一緒にやっている後輩に教えたりする時、お節介してしまう方ですが、躊躇することがあり、増田さんの考え方にびっくりしたのでつい。でも自分から言えるのはすごいなと思ったので、「おせっかいするよ、私も」と言っていきたいです！

吉田：先ほど「参加しての思いを後輩につなげたい」とおっしゃいましたが、お節介お婆さんではないですが、今回のフォーラムで、自分自身で感じたことや思いなど後輩にどう伝えられましたか。

田代：私の委員長としての代が3年生の夏ぐらいまでです。今日委員長、副委員長が決まったので、これから先輩がつないできたことを、なんでこういう企画をやっているかの思いから今の企画がある事を伝えたいです。

吉田：企画にどういう思いがあるかを伝えながら、ということですか。地域生協でもいろいろな企画で、「参加してください」というのはあるけれど、企画者の思いを伝えることができているか、と思うと不安に思いますね。医療生協の企画ではこちらの思いをどう伝えていこうと思っておられますか。

増田：難しいところですね。組織が大きくなると、仲間づくり、増資も課題になってしまいます。現場のところでは、間違っただけで伝わってしまうこともあります。なぜその課題をやるのか、これをやったことがどういう町づくりにつながるか、ビジョンを示すことが大事だと思いつつ、なかなか伝わりきれないこともあります。南医療生協がこだわっているのは、参加型ということですか。何か企

画をするにしても、いろんな方が参加できるように実行委員会形式でやります。不十分なことはいっぱいありますが、企画の段階から関わってもらうことはこだわってやっています。

吉田：高齢化がすすんで、若い方の参加が少ないと聞きましたが、若い方とのつながりがどうすると持てるのでしょうか。（**増田**：ぜひ聞かせて頂きたいです。）**吉田**：地域の中のつながりを持つということですが、小木曾先生が、若い方がつながりに少し臆病になっているのではと言われました。一歩踏み出す、つながりを持っていくことは、どういう感覚ですか。ご自分が感じていることで、どうですか。

田代：たぶん、私たちが企画している企画自体も、他の学生から見ると「イベントやっているな」ぐらいの認識、感覚で私達でも難しいです。だから自分から声をかけないといけないと思います。でも人と話したい、つながりたいと思っていてもきっかけがなく、自分から行くことができない人が多いとも思います。だから、「参加してもらおうとこれがもらえるよ」「チョコレート一つもらえるよ」と声をかけて、そこから徐々に参加してくれる子を増やせればいいよね、と学生委員の中でも話しています。段階的に。私たちからきっかけをつくって行って一歩踏み出せてもらえればいいなと思っています。

吉田：小さなチョコレート、お菓子。それは物ではあるけれども、それがお節介お婆さんの何か一言であるかもしれません。背中を押してもらえることで、一歩が出て自分が開けていけるきっかけになるのかもしれないですね。

● 組合員 自らやりたいことができる

—協同組合で

吉田：フォーラムで事例報告を聞かれて、みなさんがこれいいな、と気づかれたこと、私もこういうのしてみよう、取り入れてみようという刺激になったことはありますか。

渡部：南医療生協さんのお話で、参加型でやっていて組合員の力をすごく信じている、この組

◀座談会▶

合員さんならやってくれるだろう、とすごく力強さがあっていいなと思いました。「のんびり村※」を一度見学させていただきました。そこでも組合員さんが自分たちでつくりあげておられる。土地を提供してくださる方、壁から何から自分たちで作ろうと本当に力強い組合員の力があって、案内して下さった方が、理事会は何もしてなくて、こういうふうにやりましようと言うだけで、あとは組合員の力だけですよと言われてすごいいました。（※東海市加木屋町栗見坂にある「グループホーム」「小規模多機能ホーム」「多世代共生住宅」「地域共有スペース」の総称です。地域の中で高齢者が役割をもってイキイキと生活でき、訪れる人が「ホッ」とする、そんな文字通り「のんびり」した村づくりをめざしている。）

コープあいちでは地域委員会を行政区でつくりようとしていますが、組合員組織自体としては参加していただく方が少なくなっています。一人ひとりの力をもっと出してもらうにはどうしたらいいかな、と思ってこの報告を聞かせていただいて、すごくきめ細やかで関わっている方がたくさんだなと思いました。コープあいちも福祉事業をやっているの、福祉の考え方など参考になることがたくさんありました。どうやったらそうした組合員の力が湧き出てくるのか学んでいけたらと思います。どうしても理事会主導で、理事会が「こういうものをつくって下さい」と言わないと組合員が動かない関係になっています。組合員の方から「こうしてほしい」と逆の力がなかなか出ないな、と思いますし、一人ひとりの組合員の力ってとても大事だと思いました。

吉田：組合員の力を信じて、組合員さんの何かを引き出せる、そういうことができるといいなことですね。

渡部：そうですね。できるといいなと思いました。協同組合は組合員が主人公なので、「こうしなさい」でなくて、一人ひとりがやりたいことを持ち寄って「こうしたい」と組合員さんの方から言ってもらえる組織になるといいと思いました。

吉田：一人ひとりが言えるということは、組合員さんが、自分の気持ちを開いていることかもしれませんね。

増田：今のお話に関係して、南医療生協ルール、別名「事後承諾」とも言うのですが、結構そういうことが多い。会議に参加すると「今日あなたは司会だからね」とか突然振られたりとかします。

（**渡部：**事前にでなくて突然ですか。それは、ちょっと困りますね。笑い）**増田：**結構見切り発車の場面があります。慣れてくるとそれなりにやれる、変な自信がついてきたりします。やはりそこは職員の力なのかなと思います。背中をポンと押され、がけから突き落とされるような。でも、分からないなりに、もがいて出来ちゃうところもあって。なんかそういうところがある意味、習慣になり組合員力がついて来ているのかもしれないね（笑い）。

吉田：組合員の力と言われましたが、そこは職員が押す、そういう力もあるということですね。それはやはり、職員と組合員さんの信頼関係があるということですね。（笑い）。（**増田：**すごい度胸だな、とある意味そう思います。何かあるときはフォローする、という信頼関係があるからこそね。）**吉田：**ただ単に、突き落とすだけではなく（笑い）下には温かい、クッションが敷かれていると思いますね。

増田：私自身は、金城学院大学生協の報告の「組合員がただのお客になっていないか」ということが衝撃的でした。あらためて自分たちの姿勢を見直すきっかけになりました。組合員をお客さんにしてしまうと感じられる事は、具体的にはないですが、こういう姿勢、時々忘れちゃうなと思います。報告を聞いて、こういう気持ち続けたいなと思います。また、今度は私の番だなと、新しい理事さんの出番を作ったりとかはやっているつもりです。

吉田：田代さんはフォーラムで印象に残ったことはありますか。

田代：印象に残ったのは南医療生協の発表と、藤井先輩の発表もあらためて思いを聞けたので、2つです。南医療生協の発表から思ったのは、渡部さんが言われていた通り、組合員がやりたいことをやっているのがすごいいました。先輩の報告にもありましたが、金城大学生協の組合員自

《座談会》

身が、自分たちが組合員だっていうのがわかっていない気がして、大学の中にセブンイレブンと同じ普通の店だと思っているのではないかと私も思います。だからこそ「自分たちの意見や声を出してやりたいことが出来るんだよ」と伝えて、浸透してきているのが南医療生協だと思い、これが生協の形なのかなと実感できた発表でした。毎年3月に新入生の大学生活をサポートするために新入生歓迎会を行っています。今までは学生委員だけでやっていましたが、発表を聞いて組合員を巻き込みたいと思い、学生委員でない組合員の友達を巻き込んで新入生歓迎会をやりました。

外からの声をあまり聞く機会がなかったのですが、巻き込んで行う事で手伝ってもらった人からの感想とか、当日ここがいいね、もちろん悪いところも聞くことができよかったです。実際に、将来の組合員の1年生とお手伝いしてくれた人たちと話しあうきっかけになったと思います。

吉田：委員だけでやってしまうと運営は楽かもしれないけれど、いろいろな方を巻き込んで一緒にやって外からの感想が聞けて刺激的だと、とても力強いものを感じますね。医療生協はいかがですか。外部の方の意見を聞くつながりはどうですか。

●地域との まわりとの つながり

増田：そうですね。「よってって横丁」づくりは新規事業であり、24時間365日の医療介護を目指しているので自前でできないところが一杯あります。地域の資源は出来るだけ使わせていただくということで、「よってって横丁」づくりに向けて毎月10万人会議やイベントをして、他の団体にも参加していただくよう声をかけさせていただいています。同じ方向を向いているならば一緒にやっていきたい、ということです。つながりができる広報も配布しています。外部の方の宣伝コーナーも機関誌の中に作っています。「着工祭り」のパンフレットも協賛広告を載せましたが、こういう形の協力をいただいています。

渡部：コープあいちでは、福祉事業を行なっていますが、地域差があり三河で地域の中に溶け込み包括支援センターを委託されたり、地域や行政ともつながっています。地域生協がどうして福祉事業をするか、という議論になったりするのですが、地域に関わることが生協の使命でもあり、食材を提供するだけでなく、高齢化では介護も必要になってきます。そういうことも大事にしたいと私たちはすすめています。

吉田：自分達の組織だけでなく、いろいろな周



▲渡部千早登さん

りとのつながりがあるのは、さらに違う気づきの場になるのではと思います。田代さんからは、組合員がやりたいことを出来る生協というお話が出されました。やりたいことやるといって野放しで何でも出来ると思われがちですが、逆に、組合員自ら生協でやりたいことをやる、それが生協の形ではないかと言われました。ちょっとしたきっかけで自主的にやるとか、お節介おばちゃんが押すとか、強制されるのではなく、自主的にやりたい、関心を持つことにつながるということではと思います。

●評価され 嬉しかったこと

吉田：フォーラムの中で聞かれたことから、みなさんがやりたいと思ったこと、組織の中でやってみたいことをお話しいただければと思います。

田代：私は先輩よりしっかりしてないので、全部うまく伝えられるかどうか分かりませんが、やはり今までやってきた人たちの思いは伝えないといけないと思っています。大学生協なので、4

《座談会》

年間、6年間で終わるので、伝えないと続いていかなと思います。先輩にしてきてもらったことの中で、相談したり、教えてもらったり、だめだと叱ってもらったりしたことは、活動する中で個人的にも励みになっているので、そういう先輩としてやることも後輩に伝えていけたらと思います。

吉田：ほめられたことってどんなことですか。

田代：企画がうまくいったか自分でもわからないときがあって、ここは良かったとほめてもらえるとやってきて良かったと思いました。ちゃんとほめてあげて、次はこうやってやろうと改善していけるような後輩が育ってくれるといいと思います。

吉田：人からほめられたり評価されると、嬉し



▲田代 恵理さん

いですね。思いを伝えるだけでなく、人と関わった思い出などですね。逆に怒られてくじけてもいい思い出になりますね。

田代：委員会に所属している子に経験してもらうだけでなく、先ほど3月の新入生の歓迎会でいろんな人を巻き込んだように、他の組合員にもこの経験をしてもらいたいです。

増田：ほめられることは、生協にとって大事なことです。特に主婦にとって。男性は仕事をして認知されるけれど、専業主婦はなかなか評価される場がない。医療生協と関わって、違う自分を発見できたという事があります。自分を評価してもらえる場として、医療生協や地域生協があると思います。(吉田：なにかすることで、こんなこと出来るんだと違う自分に出会えたとか。)

増田：だって、パソコンもいじらなかつたし、パワーポイントも何のことですか、って(笑)知らなかつた。私今、パソコン触って報告してい

るじゃん、と、それだけでもたぶん関わらなかつたら、こんな自分に出会えなかつたと思います。

吉田：人と人がつながって、あなたを見た方が「あなたすごい」とほめてもらったり、自分を評価してもらい、違う自分に変化して、いい意味で変わったと思えることは、聞いているだけで大事なかなと思います。主婦って評価されないってありましたよね。私が子育て中に毎日洗濯物干していたとき、「吉田さんの洗濯物見ると元気がでる」と近所のお年寄りに言われました。子どもが3人いて「毎日大量の洗濯物がたくさんあって、ちっちゃな子のキャラクターもののシャツがひらひらしていい」と言われて、周りの人を元気づけているとわかってとても嬉しく思いました。洗濯物で評価してもらえるといいと思いませんでした。子育ての支えになる言葉でした。そのことを思い出しました。

増田：主婦のお仕事は奥も深いし、すごいことだと思いますが、あまり評価されませんね。

吉田：評価されるということは、幸せにつながるような気がします。違う自分を発見できた時は喜びにつながると思います。

渡部：私が組合員活動を始めたときもそうだったです。子育て支援に関わって、未就園児とその親と一緒に、おやつを食べたり、遊んだりしていました。理事になってからも若い人を巻き込みながら育てていけるといいと思っています。若い方で生協に入ってくれている方は便利さだけでつながっている部分もあるので、宅配してもらえるからだけでなく、もう少し中に入ってもらくと、生協は奥が深いし、いろんなことを発見して楽しいし、いろんな方と出会えますよと伝える場があるといいと思っています。そこまでなるには時間がかかるとは思いますが、若い人たちに生協のよさを感じてもらえるようにしたいと思っています。

●きっかけでつながり—嬉しさの連鎖

吉田：3月の新入生歓迎会のときなど、周りの人を巻き込むしかけとかありますか。

《座談会》

田代：私がお手伝いで呼んだ子は、違うサークル活動でパソコンの講習会を開いていたので、その講習会の宣伝とメンバー募集をしてもいいよと。伝えて募集もしました。頼んだお手伝いの子たちは積極的に活動をしていて、活発な子達だったので、この子達だったら頼めると思って声をかけました。

吉田：お聞きすると、頼めるな、この人だったらお願いできるという、日頃からアンテナをはっている、その田代さんの感性はすごいなと思います。

増田：誰でもできるわけでないと思います。

吉田：日頃のお友達つきあい、アンテナの感度のよさがあるかもしれませんね。田代さんから、



期間が決まっている中で、きちんとつなげたいという話があったけれど、田代さんにとってどういときにやりがいを感じますか。田代さん自身の思いを語っていただけませんか。思いを伝えたいと言われましたが、どんな思いか具体的に話していただけますか。

田代：入学式前は友達ができるか不安だった子が、企画に参加してくれて、笑顔になってくれたり、これで友達できましたという言葉聞いて、実際やってきてよかったと思います。そして後輩達にもそれを体験してもらいたいと思います。そこから、自分に色々な可能性があることを知ってもらいたいです。

吉田：今日の企画が楽しかったとか友達できた

と言われるとうれしいですね。気持ちが楽になってよかったと言われるとうれしいですね(笑顔)。聞いている私たちまでうれしくなります。

田代：すごい、今まで生きていた中で一番の嬉しいくらいです。

吉田：そういう嬉しい思いつて、後輩にも、こうなるよって伝えていきたいですね。

増田：どんどん連鎖していきますね。

吉田：うれしさの連鎖、いいですね。田代さんが満面の笑みで言っていただけで幸せになります。

増田：やりたいことはいろいろあって、つかみ所がないのですが、共通しているのは、顔が見えて声が聞こえることが大事ではないでしょうか。人間としてつながりがあるから、そういう嬉しさがあると思います。南医療生協としては「よってって横丁」に取り組んでいて、これだけでなく2号、3号とつくっていききたいと思っています。他世代が混ざり合って街づくりをして行きたいと思っています。私も子育て支援に関わっていききたいと思っています。そのために医療生協が子育て世代であったり大学生協の人たちであったり、そういう若い世代の人にどうお役に立てるかと思っています。細々と「健康パオ(※)」で関わらせていただいたり、赤ちゃんサークルをやっていますが、そこが広がっていいと思います。若い世代の方たちの声を聞きながら、医療生協のもっているものをどう役に立ててもらえるか、キャッチボールしながら考えていきたいと思っています。

(※大学生協の健康チェックの取り組み、医療生協の協力で骨密度等のチェックをしている)

吉田：顔が見えて、楽しかった、嬉しかったと声が届くことで力になるので、若い方たちの顔や声が届くところで企画ができるといいですね。ぜひ、田代さんのような若い人の声を発信してください。結構、お節介お婆さんは手を広げて待っています(笑い)。(増田：そう、待っているだけでなく、攻めていきます。) **吉田：**お互いがどうなのかな、と思っていますが。1歩そこからお互いがすすめば出会いもありますね。どちらかが2歩すすむのではなくて。今日もいい機会ですが、こ

《座談会》

れがきっかけになって若い方の声を聞いて発信できるといいですね。

増田：大学生のうちに地域生協や医療生協とつながって、大学を卒業したら、地域生協や医療生協に入っていたらいいですね。

渡部：そうなってもらうといいですね。若い人にもコープあいちに入ってもらいたいと思います。子育て世代を大事に思って、赤ちゃんサポートというのをしている、配送料を1年間無料にしています。もう少し先かもしれませんが、ぜひ子どもが生まれたら生協に入っていたらいいような流れが作れたらいいと思います。今、いろんな選択肢があって、その中で安全、安心を基本にしていますので、選択肢のひとつに入れていただくとありがたいです。

吉田：便利さを求めて入ってこられる方がおられて、組合員は便利さだけでいいと思っているかもしれませんが、今の田代さんの話を聞いていると、ちょっとしたきっかけで案外広がっていくのかなと思います。初めのちょっとしたきっかけがあると、つながりができるのではないかという感想を持ちました。向井さんはいかがですか。

向井：私の経験をお話しします。愛知県被災者支援センターが支援している避難者の中にフィリピンの方がいます。瀬戸の「窯のひろば※」の外国人健康チェックで知り合った通訳の協力で、その方々に内部被爆の検査の案内をしました。通訳ボランティアの方がタガログ語に翻訳してくれて訪問することができました。その方はひらがな、カタカナは読めてしゃべられるが漢字が読めなかった。タガログ語の案内を読んで、これなら考えられると言われた。この3年間のストレスがすごい。ご主人は福島にいて、一人で生活して地

震で揺れると不安で怖くてつらかったと涙を流された。訪問で初めて笑って話せたと言われた。翻訳の支援があって初めて会えた方なのですが、同じ国の人で集まれる様に呼びかけの手紙を書いてくれませんか、と言ったら、書きますと言われた。3年間そういう話ができなかった人が、気持ちを話せた。支援を提供している限り、相手は受け身です。その人ができることを少し応援することに切り替えると、今度はその人が呼びかける側になった。すごい変化がある。ひとりひとりが力、思いを持っていると感じました。

(※「窯のひろば」は、「NPO法人エム・トゥ・エム」(「M to M」)が運営している。地域の人と人をつなぐ役割を担うことを目的に立ち上げられた。瀬戸市の銀座通り商店街内にあり、カフェ、便利屋、貸しスペースの提供、野菜市の開催など、地域で様々な活動をすすめている。)

田代さんの言われた、お互いが声の掛け方がわからないけど、話ができてよかった、ほめてもらってよかった、叱ってもらってよかった、それが次に進むきっかけになるという話とつながると思う。こちらが決めるのではなく、何が困っているかを相談し、その人が決める、そのちょっとしたお手伝いができることに生協の存在意義があると思います。

フォーラムを準備する実行委員会で話してきたのは、生協が何をやったかでなく、そこに住んでいる人の思いをどう協同組合が生かしたかの事例を交流しようということでした。その人の問題や課題をきくのではなく、その人自身を、その思いを聞く。そのみんなの力でやれることが大きな流れになって社会につながる。できないことも多いが、そういう人が身近にいる安心感の方が大きいと思う。

田代さんが、思いを伝えると同時に先輩としての姿を伝えると言われた、それが大事だと思います。そして、そこでサークルの呼びかけをいいと言った。大学生生活を一生懸命考えている人だから信頼できると。そのように言えることはすごいですね。



▲向井 忍さん

《座談会》

● あなた今幸せですか

—相手が笑顔であることが自分の幸せに

吉田：人を信じると医療生協の方が言われたことにつながるといいますね。向井さんがおっしゃったように、生協がではなく、生協が持っているものを使って、地域の中で私は何をするか。みなさんご自身がこうして行きたいということをお話下さい。

田代：私がしていることは、いろいろ話していてもすぐに忘れちゃうので、メモをとることです。そのとき思ったことは、そのときにしか思わないことかもしれないので。すぐに文章にしておきます。フェイスブックにメモをしたり、ノートに書いたり、そのとき思ったことをあらためて見返せるようにしておこうと思っています。そのとき思ったことと、また同じテーマについて考えたことを見比べて、こっちの方がよかったとか、今はこう思っているとか、改めて考えられます。意識し始めたのは最近です。今後も続けようと思います。後輩に伝えるのもそうですが、4歳の妹がいるので、自分の親の方が先に死ぬので、自分の親のこととか、残しておかないといけないなと思っています。残しておくということは今のうちにやれたらと思っています。

吉田：考えって変わりますよね。こんなこと言ったのかと、成長に気づいたりしますよね。

増田：自分のことで、生協と関係ないことです。私の中では生協が9割くらい占めていて、なんでも生協に結びつけるのですが、連休中に大学時代のサークルの仲間久しぶりに会うことになっています。医療生協が豊根村とつながりがあって、友達が東栄町に住んでいて会いたいと思ったのがきっかけで、結構な割合でくることになって、19人いたなかの15～6人が集まります。卒業以来会ってない子もいます。コンタクトとれて近況聞けたり、連絡してくれてありがとうと言われたり、嬉しかったです。また、何年か振りに会うので、親のことやら子どものことやらどんな話になるのかと思っています。古くて新しいお付

き合いが、また今後どうするかわかりませんが。

吉田：電話してくれた人、嬉しかったですよね。

増田：喜んでもらって、伝わり、伝わりで、全員に連絡がついたのはびっくりでした。アナログな連絡をしていたのに、つながったのがすごい。

吉田：案外別のところでつながっているかもしれない。その後のお話も聞かせていただきたいと思います。渡部さんはいかがですか。

渡部：毎日新鮮でいろんなことを知ることがで



きます。組合員活動はしていましたが、理事としての活動はいろんなことを知らないといけないと感じています。

最近思うのは、人が成長していく姿を見守ったり支援したりできる人になりたいと思っています。私自身もそうですが、子育て支援をしていたとき、同じように関わって、どんどん活動的になって、意見も言えて中心的な存在になる姿を見ていて、私にできることは少ないが、彼女のやりたいことを支えたり、こうやるとやりやすいかなとか、まわりにサポートできる人を見つけたり。人とのつきあいは難しく、思うとおりにならないことも多いですが、心がけるのは、相手のことを聞くとか、どういうふうにいるかきちんと理解することが大事だと思っています。

食卓を囲む家族がいて、笑顔があるというのが幸せな姿だと思っています。食材を届けるというのは、幸せに関わっていると思います。他人が幸せな姿を見て、私もすごく幸せになるというか、相手が幸せ、笑顔であると、私も幸せになりますので、笑顔になってもらいたいと思って人と関わ

◀座談会▶

るようにしています。

吉田：私も、渡部さんがすてきだと思います。身近な人がすてきな人だと、いろんな組合員の活動につながります。温かい目で見られる。フィリピンの方がまた次の方を支援する、自分もやってみようということにつながります。温かい目で見ると、大事な要素で、義務感でなく、自分の幸せや喜びを感じる、喜びの連鎖になっていると思います。お話聞いて、とても温かいものを感じました。

今日みなさんお話を聞かせていただいて、小さなチョコレートであったり、お節介なおばさんであったり、支援の見守りの温かい目だったり、ちょっとしたことで地域でつながっていけるといって、みなさんの思いを語っていただきました。それは、自分達の暮らしの中、私たちの隣に存在していることがきっかけになるのではないかということを感じさせていただいたと思います。

●地域で つないでいく

吉田：最後に、向井さんに全般的な感想をお話したいと思っています。

向井：医療生協は、在宅で人生の最期を迎えないといけなくなる時代に、どうやって地域全体を支えあえるまち（病院）にするかというテーマに挑戦しています。食の問題でも食卓の笑顔を守るとがんばっているが、T P Pの乱暴な話があります。大学ではコンビニも入り、大学生協自身が優先ではない中でみんなの生活を自力で応援しないといけない、そういう大きな社会の現実が押し寄せています。災害支援でも仮設住宅（借上げ住宅）が有償になると、お母さんと子ども供で避難している家庭は貧困にぶつかるかもしれない。親として子どもを守りたい気持ちにふたをして線量の高い地域に戻らないといけないかもしれない。そういう暮らしの中での気持ちの支えになるのが大事だと考えています。

他人の幸せが自分の幸せになるということですが、人が持つ悲しみも受け止めながら、関わりを同時につくっていく時代だと思います。地域の中

でつながろうという、その人自身の内的な思いや生活体験につながれた瞬間に、問題を解決する力は、生協のなかではなく、その人自身の中に生まれます。一人ひとりが、つながりを受け止めて、他人に関与できる力を持っていると思います。小木曾先生がいう「自分をひらく」力は無限のものがああります。つなぐのは私であり、思いであり、励ます態度であり、温かい目だったり、よかったねといえる関係です。生協は「大きな公」をつなごうとしていますが、「小さな公」で足を一步踏み出す姿を温かく受け入れながらつないでいく、そんなことを協同組合の間で日々つくっていきると楽しいですね。

この冊子を通して、こうしたことをまた感じてもらえるとうれしいと思います。

吉田：お一人おひとりのすてきな思いを語っていただきました。ご協力いただきありがとうございます。ありがとうございました。



(2014年4月26日、生協生活文化会館)

報告①



地域のつづやき 集めてつくる まざり合いの まちづくり

—— 南生協よってって横丁」

増田 美紀

南医療生活協同組合 非常勤常務理事

南医療生協は、伊勢湾台風の復興活動の中から、2年後の1961年、地元住民、ボランティア、学者、医師など308人の出資で創立した、医療・介護・福祉・まちづくりの協同組合です。「みなみ診療所」は、開設初日から24時間医療対応を続け、在宅訪問看護などは保険診療に認められていない時代から、活発におこなわれてきました。

1976年に第1期南生協病院が完成すると、1病院・3診療所体制になり、在宅・外来・入院の連携がはじまり、在宅医療活動の幅がさらに広がるようになります。2000年、かなめ病院が開設されると、在宅医療の急性期対応だけでなく、回復期支援も可能になります。また、訪問診療・訪問看護・ケアマネ体制なども拡大します。

●百人会議から始まって

社会の高齢化がすすむ中、地域組合員の協同で、数多くの溜まり場づくりや、大学の体育学教室と共同で、地域の健康づくりを本格的に開始するのもこの時期からです。2003年には、南医療生協の介護施設づくりを、毎月定例公開の「百人会議」で開始します。これまでの、職員と組合員の協同のあり方をさらに広げる、市民の協同がはじまります。

この協同の過程で、「グループホームなも」や「生協ゆうゆう村」、「生協のんびり村」などの、協同組合らしい、まちのくらしと協同にとけこむ事業所づくりがすすみます。自分のくらしに必要

なものを、アイデア・人材・出資金を持ち寄り、自分たちの手でつくりあげるといふ、市民参加のこの取り組みは、2010年の南生協病院の新築移転に結実します。

53年間にわたる、地域・ご近所の協同のかかわりづくり、お互いさまの取り組みが、南医療生協を通じて、自分たちのくらしに必要なものづくりをしていくという常識を生み出しました。その過程を、ここ10年ほどに限り、その特徴を簡単にお話しします。

- ① 2001年「創立40周年2万人の健康まつり」は、全支部・事業所参加の実行委員会が企画・当日運営し、24000人が参加しました。参加協力チケット1000円でした。
- ② そして、2002年「生協ひまわり歯科」開設に向け、地域組合員が職員と連日地域訪問。開設までに診療予約患者を確保。初年度から黒字を達成しました。
- ③ 2003年に「百人会議（介護事業推進会議）」は1年開催されました。協同組合らしい、まちにとけこみ・まちとふれあう、地域の介護事業所づくり交流しました。このときから第3土曜日が地域に定例で公開され、今も続いています。
- ④ そして、2004年に「グループホームなも」の開設へとつながります。「グループホームなも」開設は、組合員たちが自転車

で地域を回り、見つけ出した空き家を改修して「まちにとけこむ」介護施設に。2012年度も「介護甲子園大会」優秀賞を2年連続して受賞。

- ⑤ さらに、2005年「生協ゆうゆう村」の開設にもつながりました。「生協ゆうゆう村」は敷地600坪以上。デイサービス・ショートステイ・多世代共生住宅・地域交流施設など
- ⑥ そして、いよいよ病院作りに向けて、「千人会議」が立ち上がったのが2006年です。「千人会議（新南生協病院建設推進会議）」は4年半の間で45回開催。市民参加の総合病院という、だれもが利用できる公共づくりを実現
- ⑦ 2007年には「グループホームなも」に続き、「小規模多機能ホームもうやいこ」開設も、地元組合員がお金も人材も日用品も集めた、身の丈に合った事業所づくり
- ⑧ 2008年には「老健あんき」が立ち上がりました。「老健あんき（29床・全室個室）」開設は、老朽化した星崎診療所の新築移転とセットで併設。「なも」「もうやいこ」と同じブロック
- ⑨ 東海市に2009年「生協のんびり村」ができます。「生協のんびり村」は敷地800坪以上。地元組合員からの土地の提供を受け、グループホームから喫茶・畑まで多角運営
- ⑩ そして、2010年「南生協病院」新築移転オープンしました。



▲「10万人会議」

「総合病院南生協病院」は2010年3月オープンしましたが、06年度から4年間で、組合員は1万6千人増え6万人に、増出資は12億円増え24億円に、支部は28増え73支部に、活動班は264班増え880班になりました。

＜最初から最後まで＞ 市民の協同

—南生協病院づくりは、推進母体の「千人会議」をつくり、健康づくりや子育て支援など「10のゾーン」にこだわり、設計段階から市民参加で具体化してきました。医師・看護師ふやしも担いました。地域協同・市民協同のこうした取り組みは、超高齢社会に対応する南医療生協の事業としての、「南生協よってって横丁」づくりに結びついたので。

＜近未来づくり＞10万人会議

—南医療生協には、現在、84地域の組合員支部と、56の事業所があります。これに市民が加わり、地域の近未来構想を、2012年4月から「10万人会議」を母体に具体化してきました。そこに、名古屋市から南大高駅前の公用地活用の公募があり、南医療生協は10万人会議での検討内容に基づき、応募したところ、最優秀事業者として選定されました。



▲完成予想図

＜医療・介護・交流 まざりあい施設＞

—これが、「南生協よってって横丁」の完成予想図です。今は更地になっていまして、この16日に更地のところで、着工祭りを行います。敷地面積は780坪の8階建て。JR東海道本線「南大高駅」前で、総合病院南生協病院のすぐ隣です。隣接して、イオン大高店や広大な緑地公園もあり

ます。

●「横丁」づくり 5つのゾーン

早速、「横丁」づくりの検討が本格化します。まず、施設を5つのゾーンに分け、具体化がはじまっています。「在宅いきいきゾーン」「かかりやすいメンタルクリニック」「健康・まちづくり歯科」「多世代にぎわいゾーン」「環境設備防災」。こういった5つコンセプトに基いてチームを5つに分けて検討をしております。

第1ゾーン 在宅いきいき

在宅いきいきゾーンは、「横丁」だけでなく、南医療生協の、これからはじまる在宅医療・介護構想の基本を担います

第2ゾーン かかりやすいメンタルクリニック

かかりやすいメンタルクリニックゾーンは、これまでの、総合病院のフロアから、診療所になることで、新たなメンタル医療展開を可能にします

第3ゾーン 健康・まちづくり歯科

健康・まちづくり歯科ゾーンは、保健予防から歯科治療の幅の向上、赤ちゃんから高齢者歯科医療まで、歯の健康にこだわるのが当たり前のまちづくりをめざします。

第4ゾーン 多世代にぎわい

多世代にぎわいゾーンは、施設利用者、組合員・市民、通りすがりの人、南生協病院や商業施設利用者みなさんが、気軽に利用できる癒しのスペースづくりをめざします。

第5ゾーン 環境・設備・防災

古い歴史を持ち、大高緑地公園など、自然と緑の多い大高の地にふさわしい、環境・設備・防災をめざします。

「南生協よって横丁」の事業内容として

<1>医療・介護事業のめざす品質は

- ①切れ目のない医療・介護・福祉・住宅事業「最期までその人らしく」支援します。
- ②医療依存度・認知症状の程度にかかわらず24時間・365日対応を目指します。
- ③赤ちゃんから高齢者までの、居場所と役割、まざりあいを実現します。

<2>医療事業としまして、①在宅療養支援診療所②歯科クリニック③精神科クリニック④精神科デイケア です。

<3>介護（医療）系事業としては、①訪問看護②訪問介護③居宅介護支援事業所④グループホーム 申請予定⑤小規模多機能居宅介護25名申請予定⑥訪問リハビリ⑦通所リハビリ 30名

⑧介護付き有料老人ホーム 申請予定、この中で④⑤⑧は申請が必要ですのでこれから申請を予定しております。

<4>高齢者住宅事業としては、サービス付き高齢者向け住宅 57室です。

○在宅療養支援診療所 1F

まず一階の在宅療養支援診療所は、1Fの中心になります。ここには、在宅専従の医師・看護師などが常駐し、24時間365日、施設利用者、地域の在宅展開に対応する、医療介護の拠点です。

在宅の専任チーム化で、これまで、外来診療と訪問診療を兼ねてきた診療所の医師などは、この施設の完成で、今まで以上に、外来医療と健診健康づくりに専念できるようになります。

○居住施設 3F～8F

居住施設は 3F～8Fです。医療・介護体制にささえられ、健康づくり・趣味の交流・のどかな時間をすごすことができる居住施設です。

3Fは、「グループホーム」を予定しています。



イメージ画像

「グループホームなも」などで培ってきた実績を活かし、ここにくらす方の、やりたいこと、やりたくないことをお任せしながら、各自のくらしをみんなでお手伝いし合っていきます。職員はその

サポーターです。認知症の方が利用対象です。

4Fは、「介護付き有料老人ホーム」を申請予定です。「横丁」には、1Fと2Fに在宅医療・介護サービスの拠点が、ぎっしり詰まっていますから、これらを上手に利用すれば、安心のスローライフを楽しむことができます。介護保険を利用できる要介護者が対象です。

5Fから8Fは、「サービス付き高齢者向け住宅」です。5F・6Fはトイレ付きの部屋、それに加えシャワー付きの部屋があります。全ての部屋にキッチンがある、11～12畳の広さです。7F・8Fは、全室にお風呂も、洗濯機置き場もある、16～18畳の広さです。60歳以上の方が対象です。

＜交流スペース 施設利用＞—3Fから8Fまで、居住施設の各フロアには交流のスペースもあり、健康や趣味の班会ができますし、1Fのデイケアや訪問リハビリの利用などもできます。また、南生協病院の健康づくり施設なども利用することができます。

＜医療・介護対応 終の棲家＞—お部屋は、ご夫婦でもお住まいになれます。病状や介護度が重くなっても、医療・介護の連携体制があるので大丈夫。「終の棲家」のすまいとして利用できる、安心の居住施設になっています

○メンタルクリニック 2F

施設の2Fには、「医療エリア」があります。メンタルクリニックは、医師・臨床心理士・看護師・作業療法士などが、外来を中心にチーム医療を展開します

くらしに近づく 精神科医療＝診療所スタイルになることで、精神科訪問看護のほか、これまでできなかった医師の往診も可能になり、より、地域に近いメンタルクリニックになります。また、外来と同じフロアに精神科デイケアをつくり、治療効果を高めます。

○歯科クリニック 2F

同じ2Fの歯科クリニックは、子どもから高齢者、障害者までが安心してかかれる歯科治療をめざします。「横丁」施設入居の方や、南生協病院

入院中の患者さんの歯科治療を積極的に展開します。

くらしに生きる 歯科活動—また、歯の健康づくりを地域・施設・病院・学校・保育園などに働きかける他、治療要望に応え、インプラント・美白・矯正などの歯科医療を提供し、歯科で健康なまちづくりをめざします。

○多世代にぎわい 1F～8F

「多世代にぎわい」としては 用があっても、用がなくなってもいい。会いたい人がいても、ひとりの時間を過ごしくたいたい。行けば、そのフロアには、あなたの、みんなの、ぬくもりのある交流があることを目指しております。

＜いやし にぎわい＞—多世代にぎわいの中心は2Fです。憩いのエリアの中心は「カフェテラス」です。ここには、「キッズコーナー」も広く取られ、赤ちゃん・子育て世代・人生の匠までが楽しめるスペースになっています。また、「手打ち蕎麦・居酒屋」のスペースもあり、ランチや和風ディナーを楽しみたい人や、仕事帰りや懇親会などでの懇談・交流にもうってつけです

＜多世代 まざりあい＞—1Fの「自習室」は、就学前のお子さんや、学校帰りの生徒たち、医学生・看護学生、人生をより習熟したい方たちなどが、気軽に利用できる30人程度の「まちの教室」です。また高齢者向けには「デイケア」・「リハビリ」・「小規模多機能」の施設、立ち寄りにもってこいの「コンビニ」・「飲食店」、「有料駐輪」施設などもあります。



＜笑顔 かかわりあい＞—1Fから8Fまで、そして、南生協病院や支部地域、JR南大高駅、イオンなども含め、医療・介護・住居を利用する人たちのにぎわいが行き交うところになりたい、そ

して、気軽に愚痴をこぼし、ちょっと解決し、笑顔になれる「まちの役場」になりたい。それが、多世代にぎわいのめざすものです。

○「環境・設備・防災」として

自分たちの用を成せばそれでいい施設ではありません。なにかあったらお手伝いができ、まちや自然にとけこむことをめざします。

協同を活かした ささえあい—南医療生協は、自然と人にやさしい緑化事業をすすめます。「横丁」の海拔は、南生協病院と同様、10メートル以上の高さです。通常の施設の1.25倍の耐震設備により、地震などの災害時には、南生協病院などと連携し、救急時の対応や、炊き出しなどをおこないます。

●「横丁」の先に見える、市民の協同の未来

「横丁」は 協同の通過点—こうして見ると、「横丁」は、赤ちゃんから人生の匠まで、利用者から通りすがりの人たちまで、誰もが利用できる、市民協同がつくり、市民に開放された施設だとわかります。その「横丁」づくりは、わたしたち南医療生協にとっては、市民の協同の通過点です。

■人口742万人（組合員比率0.94%）

■南医療生協の支部のある地域 定款地域：愛知県

南医療生協には、84地域に組合員がまちづくりをすすめる支部があり、支部が運営に参加する56の事業所があります。事業所は組合員のたまり場であり、支部と事業所のネットワークの拠点でもあります。

○地域ですすむ お互いさま

地域では、お互いさまの取り組みがすすみ、よって相談活動や、緊急時に必要な個人情報がわかる救急医療情報キットの普及のほか、すべて組合員の手配りの南医療生協の機関紙は、支部のある地域では82%の配布率で、安否確認もしています。

<無償が常識 ボランティア>

日常の暮らしでの困りごとの大半は、ちょっとしたことです。これに応え、自主的にボランティ

アを組織する支部もあります。事業所で見つけたときは、「ささえあいシート」を使って支部に依頼。お互いさまは無償が基本です。困りごとを解決に向かう力をそれぞれの地域が持っています。

これが「ささえあいシート」と、自分の医療情報を書き込み、万が一のときに利用してもらう「救急医療情報キット」です。お互いを思いやる協同がなければ普及できません。



▲「ささえあいシート」

▲「救急医療情報キット」

南医療生協の全ての事業所は、地域に必要なものを地域のみんが、南医療生協という協同組織を活用して作り上げた、協同の所有の施設になっています。こうした施設は、地域の介護サービスを提供するだけでなく、事業運営の協同、地域の溜まり場、そして新たなまちづくりの拠点になることを目指す、協同の所有の形であり、自分達でできる事は自分たちで実現する、まちづくりにつながっているのです。

横丁ができる事で、超高齢者社会に対応する在宅医療、介護、居住、交流のあり方が具体化でき、これが、支部がある地域に伝播して行きます。支部が自分たちの必要から、第2、第3、第4の様々な形の「横丁」を作り出すのです。先ほど先生の話になった、自宅をちょこっと開放することも今後検討されていくことになると思います。

こうした取組みが、津々浦々に広がり、自分達の要求を自分たちの力で実現することが当たり前になり、その地域の大人たちの協同の姿を見て、子ども達が、これまでの半世紀にわたる「無縁社会」化を乗り越え、お互い様の「協同社会」を生み出す次代の担い手にきつとなると思います。◆

報告②

大府市横根町での移動店舗と地域交流の取り組み

波多野善郎、田村哲郎、竹本一也、平林里美

生活協同組合コープあいち 大府センター



●きっかけからスタートまで

取り組みの始まりは、大府市の横根自治区の木村区長から、地域の高齢者が買いものに困っている、対策を検討しているのでぜひ生協に協力してほしい、とお話をいただいたことです。木村区長は以前からコープあいちの組合員で、個人宅配を利用しておられました。この間、担当が木村区長はじめ区長の奥さまとよい関係を築いていることからお話をいただいたのかなという思い、またコープあいちに期待をしていただき声をかけていただいたことに応えたいという思いがあって、ぜひ話を進めていきたいとお返事しました。

昨年4月から区長さんとお話をし、状況をお聞きしながら、コープあいちでお手伝いできることを検討しました。もともと共同購入センターですので個人宅配など共同購入をより地域に広げていく相談をする中で、地域の高齢者の方は、品物を見て買いたいという声結構あることをお聞

きました。コープあいちの新規事業で移動店舗を始める話がありましたので、それを紹介したところ、たいへん興味をもっていただき、移動店舗を含め対応していく事で相談を進めました。

大府センターでは、ただ単に組合員さんになっていただいて利用者を増やすという事だけではなく、地域の方、自治会の方とのコミュニケーションを大事にしながら、密な関係を築いて、暮らしのお役に立つように気軽に相談できる生協である事を目標に準備を進めました。

準備を進めていく中で、地区の方で地域の方にアンケートを取るという事になりました。自治会の方でそういった事を進めているのですが、実際に地域の方がどれくらい利用してもらえるのかということも含めて知ろうという事で、約700世帯にアンケート配布し、600枚の回答をいただきました。その内300枚で移動店舗をやるなら利用したいというお声をいただきました。このアンケートを配布する際に、コープあいちのご案内のチラシ、また移動店舗のご案内のチラシもいっしょに全戸配布する協力もお願いし、取り組みを進めてまいりました。

そのアンケートの結果を受けて、木村区長に前向きに移動店舗を地域で検討したいとお話をいただき、移動店舗担当の竹本を交えて相談検討を始めました。

相談していくなかで、木村区長から「地域で夏まつりを開催するので、ぜひ生協もそこに参加してください。」というありがたいお言葉がありま



▲横根自治区区長の木村さん



▲マイク掛けの車

した。そこで移動店舗の母店である大高店でアイスクャンデー、大府センターではジュースなどを準備して提供し、夏祭りに参加させていただきました。夏祭りの中で地域の方といろいろな交流ができ、声を聞いてその後の取り組み準備に生かしていけるようにしました。

4月から相談や交流をしていましたが、8月に正式に役所より移動店舗を開催したいという依頼がありました。10月スタートに向けてそこから準備を更に進めてまいりました。10月に入ってからセンターでも8人体制で、地域に戸別訪問をし、コープあいち移動店舗のご案内をしながら準備を進めてまいりました。10月末に無事に移動店舗を始めることができました。

●移動店舗の紹介

移動店舗をスタートするにあたりまして、停留場所、営業場所とか時間とかそういったものを全て横根自治区のみなさんが決めて、それをどうお知らせ活動するかということも全部自治会のみなさんにご協力していただきました。今現在6カ所、1日朝10時から夕方4時までが営業時間ですが、今7カ所になって1カ所あたりだいたい平均して、30分から1時間くらい停留して営業させていただいています。

営業許可との関係がありまして、どうしても区切られた空間でないと乳製品の販売、生肉の販売、魚介の販売ができないこともあります。どうしても上り下りしなくてはいけない、このような、車内に乗り込んでいただいて買い物をしていただくというような車は、いまコープあいちでは、この1台しかありません。事故を起こしてしまうと

▼移動店舗「フレンズ便」



▼車内生鮮品



みなさんに大変ご迷惑をかけてしまいますので、本当に安全運転で営業をしている訳です。中に入ってもらおうと右側が生鮮品です、一般品とかお肉、魚、冷凍品、お総菜そういったものが並んでいて、左側にパン、お菓子、食品などが並んでいる配置になっています。通路幅は80cm位しかありません。長さが庫内で4m位しかないの、せいぜい入っても5~6人、5人入ってしまうとUターンできないというような車内です。朝お店で9時を目安に刺身の2点盛りや柵なども準備して積み込み、利用者さんが待っている所に伺っています。

お肉なんかも持って行くのですが、場所によって売れるものがまるっきり違います。そういういろいろな利用の状況を把握しながら、日々商品の品揃えや量などを変えて、満足して買い物をしていただけるような配慮を今一生懸命しているところです。

冷凍食品は、一番上は「骨取りさば」です。生協の人気商品ですが、どうしてもご高齢の方が多いということもあって、「骨取りさば」や冷凍うどん、結構寒いですがアイスなども売れます。一番人気のあるのが揚げたてのお総菜です。お店で朝揚げたお惣菜を1個バラ売りで80円から100円くらいの価格設定、かき揚げは120円ですが、そういった惣菜を非常に喜んで買ってください事になっております。

今だとバレンタインデーのチョコや、ひな祭りのひな菓子も積んで楽しみにということをやっています。だいたい車内に積める品数が500品目くらいしかなくて、それも1個か2個しか積んでいないので、誰かが買うと無くなります。そう

いう時には、ご予約をいただいて次週持って行きます。細かい対応を今一所懸命しているところです。

●利用者どうしの会話

「〇〇さん、もう来たったん」という会話がその中であったり、「何買っとるん」とおばあちゃん同士がお話をされていたり、「とうふ、どこにあるん」と誰かが聞くと、後ろで買い物をしていた人が「ここにあるよ、木綿がいいの、絹がいいの」応えることもあり、ご利用者さん同士の繋がりもできつつあります。



今日初めて他人と話をしたとか、初めて家から出たとかいう人がいます。寒い日が続くと、家に引きこもってしまう方がご高齢になると多いので、買い物という機会を外へ出たり、人と会話をしたりする機会が作れたらいいと、コミュニケーションをとるように心掛けています。特に名前を覚えて、大きな声での言葉かけを一所懸命にやっています。

最後に、車から降りていただくのですが、どうしても足腰が少し弱くなっている方もいらっしゃるのでは、買い物かごを持ってあげるなどの配慮をしています。みなさんに買い物が楽しいと思ってもらえるような取り組みをしています。

●うれしい反響 新たなつながり

10月末に木村区長はじめ横根地区の自治会のご協力をいただき無事にスタートすることができました。初日は全所合わせて120名を越える方が買い物に来てくださいました。

初日の様子が中日新聞の知多版に掲載されました。移動店舗では木村区長が一度も欠かすことなく全ての開催場所に参加され、自治区の広報車で地域にマイク掛けをしていただいて、その後に移動店舗が来るようになっていきます。みなさんにお知らせをしてくれていました。大府センターからも毎回職員が参加し、お買い物に来てくださった方と世間話をしたり、お買い物のお手伝いをしたりしています。

「ふれあいベンチ」が大府市社会福祉協議会から寄付されました。来ていただいた方が集まってここに座って自然に会話が出来てきます。

利用者の方々の声ですが、「スーパーが遠くて足がないので助かる」「お花は遠くへいけないと買えないので助かる」という声。「コープ商品、おいしかったからまた持ってきてくれる!？」という、ありがたい声もいただいています。また、「近所の〇〇さんも誘ってくるわ」「普段なかなか会えない〇〇さんと会う機会ができた」などの嬉しい声もいただいています。



▲利用者のみなさん

●移動店舗からさまざまな取り組みへ

この取り組みはまだ始まったばかりです。さまざまな地域にコープあいちが移動店舗を始めていることが各行政で話題になり、大府市と1月28日に、地域の見守り活動に関する包括協定を締結しました。きっかけは横根町との移動店舗車の取り組みです。社会福祉協議会のみなさんが活動に参加され、大府市にコープあいちの活動を紹介してくださったことで、見守り活動に関する包括

協定を結ぶことができました。この見守り活動は、生協は地域へ商品を配達していますが、ただ配達するのではなく、地域をしっかり見守っていこうということです。あるお宅で新聞が何日分もたまっているという状態があり、「これは普通じゃない」ということで、すぐ大府市に連絡し対応してもらったということや、玄関先でおじいさんがうずくまっていたのに配達担当者が遭遇して、大府市に連絡するといったことがありました。このように連携を取りあって異変に気づいてすぐに対応できるように活動して地域をしっかり見守っていこうという協定です。



▲大府市と「見守り活動に関する包括協定」締結

私たちの大府センターのエリアは知多半島全域で10の市町村があります。この取り組みをしていることが近隣の市町村にも話題になっており、今度は阿久比町で防災の協定を締結することになりました。東浦町でも、移動店舗の要望もいただいています。地域の方と繋がっていくということが重要だと感じています。大府市横根町だけではなく、さまざまな地域とつながることで、コープあいちのやっていることを広めていけたらと思っています。

横根町で始まった移動店舗ですが、隣の北崎町は横根町以上に買い物の困難な方が多くいらっしゃるということを横根町の木村区長さんから聞きました。先日、自治会の方と懇談し2月20日から、横根町の配達の中で北崎町でも移動店舗車をスタートすることになりました。たくさんの方に来ていただける予定で、まだ移動店舗車は1台しかありませんが今後、2台目、3台目が、これからの時代にとっても必要になってくると思っています。

最後になりますが、今回は横根町の木村区長からお話しいただいたことから始まった取り組みでしたが、コープあいちは、様々な商品をただ配達するだけというのではなく、様々な地域の方といろいろな繋がりをもって、地域に本当にお役に立ちたいと思っています。これからも引き続き気持ち強く持って、地域社会に貢献していきたいと思っています。

◆



●その後の状況

毎週の店舗販売の日には、引き続き、自治区区長の木村さんが、必ずマイク付ミニキャブで販売車の到着をマイク掛けでお知らせ活動をいただいています。その声が合図となりご利用の皆様が来てくださいます。ご利用の方の中には曜日の感覚を忘れられる方も多く（本当のお話です。）マイクは合図替わりになっているとのことです。

横根地区での活動がお隣の北崎町でも4月23日より本格的に5か所で始まりました。

横根地区同様に北崎町は大変お買いものが困難な地域で、大府市地域議会での横根町での報告から区長さん同士のつながりもあり今回のスタートとなりました。

現在、北崎地区でも毎週約50名にご利用いただいています。たくさん声を聴きながら今後も地域の暮らしに貢献していけたらと思います。



報告③



「コープぎふ おたがいさま東部」 設立準備状況

佐藤 郷子、大山 豊

生活協同組合コープぎふ「おたがいさま東部」

●「くらしの助け合い」は必要 なんとかしよう！

佐藤と申します。多治見市は暑いところで、去年は四万十市に一位を譲りましたが、かつては日本一暑かったところに住んでいます。生協歴は30年以上になると思います。コープぎふたすけあいの会の東部地区の幹事とコーディネーターをやっています。東部地区は、名古屋のベッドタウンとして可児市、多治見市があり、陶磁器の産地として、土岐市、瑞浪市があります。そして観光地の恵那市、中津川市とあります。広い地域とさまざまな生活パターンがあり、「東部地区」とひとくくりにするのは難しい所でもあります。

今までは、この地域全域でたすけあいの会を展開していましたが、この2～3年の間で利用時間が半減し、利用人数も3分の2となり、どうしてこんなことになり続けているのかなあと感じていましたが、その間にも、いろいろ努力はしてきました。学習会にはまあまあ参加があるので、そんな場で「会員になりませんか」とPRするのですが、にっこり笑って帰られてしまうばかりで、なかなか広まりませんでした。

アンケートでみなさんに聞いたんです。どうして利用がのびないかという話もしました。利用者からみると、これがあるから助かると言われるので、いらんわけではなさそう。「くらしの助け合い」は必要なこと、細々とではまずいなということで、どうしよう？といろいろ考えてみました。

利用料金をコープぎふ全体で数年前に上げました。1時間の基本料金を千円としました。陶磁器の地場産業工賃はあんまり高くなく、パートも交通費込みで1時間750円しか出してくれない地域だったんです。利用する方、おうちの方から「高い」と「時間を減らして」という声もあったのかなあと、これはみんな想像ですが。

声をかけて活動してくれる会員になってもらうために毎年会費が千円要って、ハンドブックの説明で1時間半もらって、せっかくなっても年に一回あるかないかの活動では、次の年に「何も活動ないからいいですわ」と活動する人、利用する人も減る。依頼があるときは、活動する人がいないから大騒ぎになる。やりにくい活動になって、利用する人からもお願いしにくいとも言われました。年配の方だと市外局番違うので「えらい所にかけてる気がする」という声もでました。いろんな理由がからみあってなかなか利用しにくいなあと。「どうしよう」「どうしよう」と言ってもだめなのでなんとかしよう！と。数年前、飛驒で「おたがいさまひだ」を立ち上げて、地域に根付いてすごく助かっていると聞きました。見に行こうということになり、見学にも行きました。

●楽しく、お互いやれることから

飛驒の「おたがいさま」は、元は「たすけあいの会」のメンバーがやっているの顔見知りです。飛驒もおたがいさまは以前利用者もなく、活動時

間も短く、今の東部と同じ悩みを抱えていました。けれど、今では誰もが利用したがるようなものを創りあげています。そこでいろんな話を聞きました。すごいなあと思ったんですが、「生協しまね」はもっとすごい。「見に行ったら元気ももらってやっているんだよ、行って見ておいで」と言われ、百聞は一見にしかずで、一昨年の秋、島根へ行って見せてもらいました。その時はたすけあいの会のメンバーの中で「ああしよう」「こうしよう」と言っていたんですが、島根の方にも「地域のニーズをもっと聞かないといけない、何がやってほしいか、聞かないとダメだよ」と言われました。

生協は「おしゃべりパーティ」をよくやっていますが、2月に「バレンタインパーティ」をやりました。「たすけあいの会」に関わっていない人や少し知っている人、エリア委員会でいろんなことやっている人など、いろんな人に声をかけてやりました。目からうろこの意見も沢山ありました。その後、間を空けず3月に、「ホットプレートパーティ」を行いました。そこでも、なるべく沢山の人の人ということで友達の友達を誘って。子ども連れのママがたくさん参加してくれて「自分のできる事なら子連れでもやれるよ」「楽しければ参加したい」と聞きました。「楽しくないとだめかな」「いろんなことお願いするよ」などと話しました。皆さんの意見を書き出しながら5月に準備会を立ち上げました。「困りごとを解決」というと尻込みしてしましますが、「そんなに私は立派ではない、でもやりたいことで応援する」「お手伝いならできる」と言われました。そして、共同購入で「おたがいさま通信」の配布も始めました。

●「あったら助かる」参加の広がりへ

アンケートをとりました。こういうことやりたいと思っているがどうですか？って。生協のチラシは見えてないと思いこんでいましたが、45名の方が返してくれました。すごく感激しました。島根に行ったとき「人数がちよっとしか集まらないから、それはいらないと思うのは間違っている」と言われました。一人でも二人でも集まってくれたらその人にとっては大事なことから。この

45名の方より「応援もできるよ」とか「お手伝いしてほしいよ」という声をいっぱいもらいました。5月の準備会、どれくらいの人が集まってくれるのかなと思っていたら、準備会を何回かやって延べで25名が参加していただきました。その人たちは今まで「たすけあいの会」とかやってなかった人ですが、「おたがいさま」と聞いたとき、団塊の世代の方は「社会参加ですよ」とか「10年たったら自分ができなくなるからやってあげるのではなくて、自分がこういうのがあったら助かる」という思い、そういう熱い気持ちをもって参加してくれました。自分のこととして考えてくれているなあ、力がわいてきました。

最初は固かったのですが、パンフレットづくりに子連れのママさんがグループに入っていてくれて、字ばかりの読んでもらえないようなものから変わりました。20代、30代前半の組合員さんが参加したくなるようなかわいいチラシも作ってもらいました。

コープぎふでアドバイザーやってみえる毛利さん、千葉で「おたがいさま」創りに初めて関わられ、そして島根、香川、石川など全国の「おたがいさま」創りを応援してみえます。毛利さんを講師に「おたがいさま」の学習会を東部の地域でやりました。「おたがいさま」がそのまま会の名前になっているのはすごくいいですね、できることの応援を、と言われました。生かされているのは、自分がどう生きて行きたいか、その応援ができるすばらしさを聞きました。それを聞いた皆さんが感激して「こういうのがつくれるといいよね」と気持ちを新たにしました。

●話し合っ 運営

これからどう展開できるか、「話し合いの中で決めていこう」と、決まりきったルールブックは避けて「こういう時はどうしよう」とみんなで話し合い共有しながら準備を進めています。

PR活動の一環でお店のイベントなどでフリーマーケットをしています。今までチラシを配っても、「あっそう」で終わっていましたが、フリーマーケットだと立ち止まってくれて、「おたがい

さま」の説明すると「いいね！」と会話も生まれました。準備会のメンバーも「楽しかった」と言ってくれ、楽しんでやれているなあ、とまた進歩できたと思っています。1月の終わりに事務所も多治見支所の中にできました。いろんな人が事務所に来てくれて、こんなふうにするといいと、話し合いもできるといい、などと言葉も弾んでいます。今後は行政とか他の団体とかにも案内し、生協の職員さんからもいろんな情報を聞き取り、生協全体と地域とがつながっていきける「コープぎふおたがいさま 東部」にしていきたいと思います。

●組合員の熱意にふれて

コープぎふ職員の大山です。本部で組合員組織部のエリアマネージャーの役割をしています。私は「おたがいさま東部」の準備会事務局ではなく「応援者」として関わっています。今回のフォーラムのテーマ「あなたは今幸せですか？」って書いてありますが、私、めっちゃくちゃ幸せです。生協に入って30年、仕事をしていて「幸せ」と思ったのは多分この一回かな、と言うと怒られそうですが（笑い）。20年前たすけあいの会ができた時の組合員さんのパワーはすごいと思いました。3年前、エリアマネージャーになって、「たすけあいの会」を担当して、幹事やコーディネーターのみなさんと思いをし合う中で「おたがいさま」ができてきました。

「エリアマネージャー！すごいね」と言われますが、普通の担当です。「おたがいさま ひだ」にも行きました。「生協しまね」には2泊3日で行って来ました。理事長からは後で「車なんかで行くな」と言われましたが、ワゴン車で、8人で行きました。良かったと思います。片道7時間、佐藤さんや大竹さん、喧嘩諍諍自分の思いをしゃべって、「おたがいさまを創りたいね」「島根みたいになりたいね」と参加したメンバーで共有できてよかったなあと思います。

● 組合員どうし 助け合い

「たすけあい」も「おたがいさま」も何も変わ

らない。「何が違うんですか」って宿題をいただきましたが、組合員同士のたすけあいと考えている部分では全くかわらない。仕組み、制度は違があるかもしれませんが、基本的な部分は何も変わらない。みんなで「どうしたらいいかしらができるか」を考えていったときに、「おたがいさま ひだ」があり、島根の「おたがいさま」がある。

「おたがいさま」は「生協そのもの」と考えています。なんら特別なことをやっているわけではないし、相互扶助の組織でもない、と思っております。「生きることの応援」ではなく「生きていくことの応援」ができるといいなあと思います。

応援者説明会を7会場ですべて事前案内をして開催して、48名の方から「参加したい」と申し込みがありました。準備会メンバーが25名くらいありますので、参加者は70～80名になり、広がってきました。恵那では男性が一人参加され、奥さんが見ていた「おたがいさま」のチラシを見て「これならわたしできるかも」と電話があり、「ぜひ来て下さい」と話しました。今年、退職されて第二の人生として関心をもたれました。説明会の中ではらっきょうを10家族分くらい漬けている方があり、それを聞いた方が漬け方を「教えてください」とか、盛り上がりました。それから、若いお母さんが「子どもは小さいけれど、お年寄りの方の話相手くらいならできますよ」とか、「第2子を考えているがそのときは応援してほしい」とか。“おたがいさま”の関係がこれできると思っています。

「小さな公」と「大きな公」の小木曾先生からお話がありました。「おたがいさま」は「小さな公」をつむぎあって、「大きな公」にすると言えらんじゃないかなあと思います。南医療生協の方からは「おたがいさまは無償が基本」と言い切られてしまいましたので、「おたがいさま 東部」は「有償のたすけあいシステム」としています。そのあたりは皆さんで考えていただけたら、と思います。

金城大学の方の発表(報告⑤)は素敵なキーワードがあります。「観客にも演者にもなれる最高のステージだからです」。まさにそれが「おたがいさま」ではないかと思います。 ◆

3/15 設立総会を開催しました、その様子とその後の状況です。

みなさん応援、よろしくお願いします。（3月26日発行 「おたがいさま通信」NO2より）

『設立総会』を開催

3月15日、多治見支所において「おたがいさま東部」の設立総会を開催しました。総会には、準備会メンバー・応援者、そして来賓の皆様等五五名が参加されました。総会には、遠くは、生協しまねの野津副理事長さんも参加頂きました。生協しまねは、ちばコープで始まった「おたがい



さま」が花開いた最初の生協でもあり、今年度は県内全域で「おたがいさま」が活動を始められる予定だそうです。「おたがいさま出雲」は設立5年で経済的にも自立した運営を昨年度から行ってみえます。総会に参加された可児市こども課の課長さんは「とても素晴らしい取り組みですね。市としても期待します」と感想を言ってみえました。

最近の状況

- ①「応援者説明会」を述べ、13会場で開催し、登録者は80名を超えました。説明会に参加された方からは、「これなら、私にもできそう」「今は、応援者登録しますが、第2子を出産する時は利用者です」「犬の散歩に行く事はできますが、我が家の犬を洗う時は大きいし、自分も年なので手伝って下さい」「庭の草取りをこれまでは1人で行ってききましたが、2人の方が早いし、楽しいので手伝って下さい」といった声が寄せられています。
- ②本稼働は、4月1日からですが、笠原で高齢の親さんと暮らしている方から、包括支援センターと通して「自分が出勤した後、デイサービスの人が迎えに来る30分の間、見守りを頼めませんか。とても心配で困っています、との相談があり、月～金曜日の朝、見守りの応援に入っています。
- ③その他に、市立恵那病院の生活相談員の方から「患者さんの退院後の家事援助はできますか」といった相談や、春日井にお住まいのコープあいちの組合員さんから「母は今施設に入っていますが、間もなく退所予定です。実家は岩村なのですが、しばらく家事援助はお願いできますか」といった相談。また、下呂にお住まいの組合員さんから「仕事が中津川市なのですが、子どもが小さいので連れて行っています。仕事の間の託児は頼めませんか」といった相談も入って来ています。

活動スタートに向けて

- ①3月27日に「第1回運営委員会」を開催して、スタートに向け最後の準備を進めています。また、多治見支所内の事務所にコーディネーターが交代で詰めはじめ、電話対応や事務作業の行い始めました。
- ②職員向けに「おたがいさま東部」の学習会を開催しています。27日は多治見支所、28日は恵那中津支所で開催します。多治見トランコムさんは日程調整中です。可児・多治見・恵那店でも開催できるよう運営部と相談中です。
- ③多治見・恵那中津支所エリア内の行政、社協・包括支援センター等へ設立報告を含めて案内を行う予定です。
- ④「おたがいさま東部」のフェイスブック&ツイッターを開設準備中です。 ◆



<おーくん>

報告④

組合員参加の地域づくり について 伊賀エリア会活動

速見 正子、森本 幸代、阪 達男

生活協同組合コープみえ 伊賀エリア会



●はじめに

コープみえの配送センターのセンター数は、北は桑名、大安から南は伊勢、紀北、尾鷲、熊野という事で、今日発表する私たちのセンターは伊賀ということで以上9センターあります。組合員参加の地域づくりを拠点として、エリア会は2011年の9月に設置の準備を進めて9センター中8センターが現在活動を開始しています。発足準備をしている紀北センターにエリア会が発足すれば全センターでエリア会の活動開始という事になります。

●エリア会とは

組合員の組織機構図上の位置づけについて説明します。エリア会は理事会とつながって活動を進めております。地域の諸課題の取り組みについて理事会方針を理解したうえで、組合員のくらしの向上をめざした活動を進めています。

エリア会の目的はコープみえの「2020年理念ビジョン」の実現に向け、センターを拠点とした地域でくらしの課題に取り組むことになっています。合わせて理事会方針に基づき、くらしの話題に取り組むことを目的にしております。ビジョンは3つ掲げられておまして、1つが地域と協同して生協に期待される社会的役割を担っている姿、2つ目としましては、食とくらしに貢献している姿、3つ目としましては人と人がつなが

っていることが実感できる姿という事になっています。以上のビジョンが実現できるよう活動を進めていきたいと考えています。

エリア会は自主的・自発的に組合員と理事、それから事務局で構成し総代会方針に基づき、くらしの課題に取り組んでいます。その取り組みとは、この間理事会で整理してきました福祉政策、地域の諸団体との関係づくり、ユニセフ、それから消費者問題消費者行政への取り組みの考え方にに基づき、総代会方針を具体化する取り組みとしています。

募集案内は「生協がみなさんの地域の身近な存在になっていただけるよう一緒に活動していただける方を募集します」という見出しを書いて、会員募集のご案内チラシを各センター2週間連続で配布しました。伊賀センターの場合は5名の応募があり即エリア会が立ち上がりました。応募が3名に達した時点で、常務理事会に報告して承認後活動開始ということになっています。

●エリア会活動を進めるにあたって

総代会方針を具体化するためにセンターを拠点とした地域の状況をわかる範囲内でまず調べて把握することから始めます。具体的な取り組みを進める上で大前提になります。当該地域の行政の施策、それから地域活動、そして諸団体の活動状況を把握することが重要だと考えています。まずは全体的な状況を把握して活動の中でさらに

把握して進めていくことが大切です。

コープみえ全てのエリア会で取り組む課題として共通課題はくらしの課題です。このくらしの課題にはふたつあって、ひとつは消費者問題、もうひとつはユニセフ活動です。他に各地域の条件にあった個別課題にも取り組むという事も課題にあげられています。

●エリア会の構成

エリア会の構成は組合員3名以上を基本としてその中から代表1名を選出します。他に地域の理事1名、事務局として地区部長とセンター長が配置して、共通課題と個別課題について年間活動計画案を相談して無理のない活動計画づくりを進めていきます。活動計画を基本に月に1回会合を持って、活動の内容を決定して取り組みを進めております。理事会とつながった自主自発の活動として、地域行政それから諸団体、個人とのつながりをつくりながら進めていきます。

エリア会の代表は、月1回の会合の議長になります。参加組合員の意思のとりまとめを行います。対外的な活動では、理事を補佐する役割も担います。理事は理事会とエリア会をつなげる役割を担います。理事会の方針をエリア会に伝えて具体化に責任を持ちます。対外的な活動では生協やエリア会を代表して活動を行います。事務局は地区部長とセンター長が担います。エリア会の議事録、それからエリア会の活動が円滑に進むよう実務、それから対外折衝ですね、それから活動計画の起案などを行っています。

エリア会活動の留意点といたしましては、組合員の自主活動として合意確認のもと、活動を進めていきます。対外的な活動では、コープみえの方針に沿った対応、品位、節度をもった態度を維持していきます。任期は2年として毎年7月から翌年6月までを1年としております。期の途中からの参加につきましては、コープみえの常任理事会の承認があれば参加することが出来ます。

最後に活動補助費は月に一回以上会議、活動費は4千円、代表の方は6千円の活動費が支払われるという事になっております。月に何度も会議を

行っても活動費は4千円、または6千円という事になっております。あと昼をまたぐ会議、活動が続いた場合は昼食補助費として上限800円の支給を行っています。合わせて通信費、交通費は別途支給しています。

●消費者問題に関する取り組み

共通課題の一つである消費者問題に関して活動報告をいたします。消費者問題に関してどのように取り組めばいいのかを考えました。そして結果、消費者被害に関する学習会を開催してはどうかということになりました。学習会の開催依頼はどこへ問い合わせればいいのかから始まり、いろいろどうすればいいのかをエリア会で考え、名張市社会福祉協議会へ問い合わせました。そこでは名張市役所に設置されている総合窓口センターを紹介してもらい、さっそく問い合わせしてみました。そこに消費生活専門相談員という方が常駐されていて、消費者問題に関する学習会の開催について相談を持ちかけましたところ、ぜひ開催しましょうというご返事をいただき、即開催することが出来ました。

主な学習会の項目は、身近な悪質商法例について、クーリングオフの適用される取引形態について、クーリングオフの仕方について、困った時の相談先について、などでした。クーリングオフの仕方も知らず、困ったときの相談先も知らず、そのまま子どもさんの学習教材費として10数万をだまし取られたと方が学習会に参加されていたらやっぱり、もう少し早く学習会を開催していたらこういった被害にあわなくて済んだのではないかと思います。このような例がなくなるよう啓発活動が続けていこうと思っております。啓発活動が続けていくにはどうすればいいのかという事を考えました。ちょうどいいタイミングで、消費者啓発地域リーダー養成講座が開催されるということを知り、これを県の広報紙と、コープみえ理事会資料で確認することができましたので、すぐに講習を受けました。内容は、消費者行政の現状等について、消費者教育推進法の成立、健康食品の送り付け、インターネットや携帯メールでのワンクリ

ック請求、悪質商法の手口、クーリングオフの仕方等でした。養成講座の終了後、県の方から消費者啓発地域リーダーの登録についての呼びかけがあり、伊賀エリア会メンバー全員が三重県消費者啓発地域リーダーの登録をしました。

名張市役所総合窓口センターからは、消費者被害の実態調査に協力していただけないかという依頼があり、2013年12月2日から12月6日の配達週に「消費者被害未然防・拡大防止」アンケート用紙というのを配布しました。5000枚配布しまして2012枚の回収となりました。アンケート用紙は理事と一緒に12月26日名張市総合窓口センターへ届けに行きました。その際、理事から総合窓口センターの室長へ、消費者問題学習会の開催を年に1～2回コープみえ組合員対象に開催していただけるようお願いをし、開催約束を取り付けてきました。



▲名張市消費生活者被害防止ネットワーク・プロジェクトへ
消費者被害アンケートを届ける

●ユニセフ活動の取り組み

ユニセフについてと言ってもあまりよくわからないと思ったので、三重県ユニセフ協会の事務局長を招いて、まずユニセフとはについて学習をし、ユニセフ活動の必要性、ユニセフ募金の使途、ユニセフ活動全般についての説明を受けました。その後ハンドインハンド募金に取り組みました。その取り組みは2012年12月に伊賀エリア会として第1回目ユニセフハンドインハンド募金を、伊賀市社会福祉協議会主催の「ふれあい生き生きサロン居場所づくり」で行われていました、地域のクリスマス会に参加させていただき、ハンドインハンド募金の呼びかけをさせていただき



▲ユニセフ・ハンド・イン・ハンド募金風景

ました。伊賀エリア会第2段の取り組み報告です。2013年10月にコープみえ商品くらしの活動交流会で、ユニセフコーナーを設置し募金活動を行いました。

ユニセフ募金第3段の取り組みとしまして、2013年12月8日、ユニセフのハンドインハンド募金活動を行いました。2013年は第35回ユニセフハンドインハンド募金のテーマである「栄養不良から小さな命を守ろう」と呼び掛け、ハンドインハンド募金のレンゲの種付きチラシを配布しながら募金活動を行いました。世界で年間約310万人の5歳未満のお子さんが栄養不足のため亡くなっている事から、小さな子どもの命を守ろうと呼び掛けて募金活動を行いました。募金活動はアピタ名張店の入り口付近をお借りして行いました。

この日はもの凄く寒かったのですが、いったん出口を出られた家族連れの方がまた戻って来て、小さいお子さんが募金箱に入れてくれはるということがたくさんありまして、寒かったけれど立って良かったなと実感しました。

●地域の条件にあった活動として

一介護者の接し方の学習 お買い物応援

伊賀エリア会には名張と伊賀二つの地域があります。まず名張のエリアの状態、エリア会に限らず、高齢者社会にむけて地域としてどのような取り組みを行っていけばいいのかということを経験したメンバーと話し合いました。高齢化社会にむけてエリア会として介護はなかなかできないのですが、介護している方のフォロー

はできないかと話し合いました。介護者フォローを行うにはどうしたらいいのか、学習会を開催することとなりました。名張市社会福祉協議会から講師をお招きして「介護者のみなさまとの接し方、聴くととは」について学習会を開催しました。

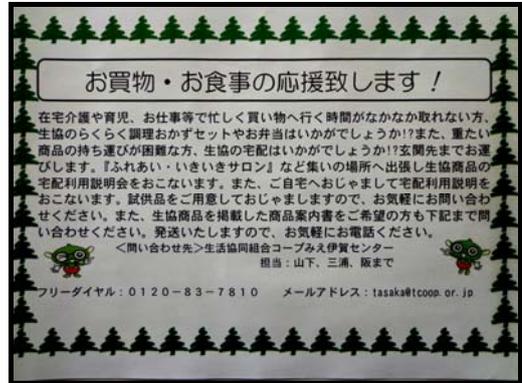
話を聞く事で必要なことは、相手の立場に立つ、相手の目線に立つ、相手の言う事を理解する、聞き上手になることでした。次に相手のことを理解するという事については、相手が何を求めているかを察すること、感受性を研ぎ澄ますこと、洞察することでした。次に自分を知るワークとして、話す内容をよく聴き、理解して勝手な解釈をせずに、質問に答える。そういう中身でふたり一組になり、ある絵を見て言葉だけで相手に伝え、伝えられた方がその伝えたことを絵に描くというワークをしました。実際にはその通りには描けず、伝えることの難しさを感じました。傾聴ワークとして、聴き手側と話し手側となり、座り方、距離感、うなずき方、あいづちのうち方などを中心に実践として学びました。



▲「介護者のみなさまとの接し方、聴くととは」について学習会

学習したことがどこまで通用するかということのため、名張市社会福祉協議会主催の介護サロンにエリア会全員で参加させていただきました。介護者のみなさんの接し方、聴くととは、についての学習を実際に介護サロンに参加し実践していきました。正直いって、ただの座談会に始まって雑談に終わったような感じがしたのですが、しかし参加された方は、楽しかったし、すごくよかったと笑顔で帰っていただけました。その時によかったなと思い、地域と人と人とのつながりを感じました。

次に伊賀市社会福祉協議会が月に1回発行している広報紙「伊賀び〜と」です。この広報誌は、コープみえ伊賀センターがお買物応援企画として掲載させていただいています。お買物応援はひ



▲お買物応援企画の広報

とつの取り組みですが、高齢化社会に向けてこれからつながっていく一つひとつの手段として広報紙への掲載は今後も大切にしていきたいと思っています。このお買物応援企画については、社会福祉協議会各地域で展開している「ふれあい生き生きサロン地域とつどいの場」に参加している地域の方からは、依頼があれば生協職員がおすすめにいくことも内容の中に入っています。このお買物応援の説明は実際に掲載されているものですが、これは季節によって内容を替えています。

他に地域への参加の取り組みとして、春は名張市主催の「名張さくらまつり」に参加し、生協商品の販売を兼ねて生協活動の紹介を行っており、秋は、名張市商工会議所主催の「とれたて名張フェスタ」に参加し、生協で取り扱っているリンゴを販売しながら生協活動の紹介を行っています。また、昨年11月5日に夕食宅配をスタートしました。それとお知らせも紹介もエリア会で担っています。

2014年度も伊賀エリア会は地域のみなさまとつながり合いを深め、行政諸団体の皆様と一緒に、くらしの課題に取り組みます、地域の皆様から「生協っていいね」と思われる組織づくりを目指して取り組んでいくことと考えています。



報告⑤

みんなで作ろう新店舗 ～クリアチオの挑戦～



藤井 千明

金城学院大学生協同組合・全国大学生協連東海ブロック

●はじめに

新店舗を考える学生委員会クリアチオを中心とした新店舗づくりの取り組みを紹介します。

新店舗づくりというと凶面をひく設計をイメージする方が多いと思います。クリアチオは、組合員の充実した大学生活を支える役割を担う大学生協が、ただ商品を陳列する箱を作っておしまいではいけないと考えています。生協店舗にはそこのコンビニとは違う生協らしさが必要です。では生協らしい店っていったいどんなものなのでしょう？みなさんは考えたことがありますか？この報告では金城学院大学生協に関わる、みんなの店づくりに対する思いをお伝えしていきます。

●生協の新店舗づくりへの思い

私は大学院に所属していて、高齢者の住まいに関する研究をしています。クリアチオの担当理事として所属する他のメンバーと一緒に、店舗づくりに関わる様々な取り組みを行っています。今から丁度2年前、私は建築系学部の4年生でした。卒業設計で金城学院大学のキャンパスリニューアルをテーマとしていたのですが、とても悩んでいたことがありました。当時の出来事がいまの店舗づくりの取り組みに大きく影響しているの、少しお話をさせてください。

私が悩んでいたのは、学内の売店や食堂の機能として本当に大学生協がふさわしいのかという

大学の中に大学生協店舗をつくる
“強み”とは、一体何なんだ!?

ことでした。学内に生協は本当に必要なのか？ものを売り買いするだけなら、その辺のコンビニを学内に導入すれば十分ではないか？大学の中に大学生協の店舗を作る、大学にとっても学生にとっても強みになるのは一体なんなんだ!？このような感じで悩んでいました。そこで私は、金城学院大学生協の店舗の中で行われている取り組みを観察することにしました。

●組合員による店舗活動

金城学院は学生組合員による店舗活動が盛んに行われています。例をいくつかご紹介します。まず、食環境栄養学科の学生による「内製井」。これは学生たちがカロリーや栄養バランスを計算したレシピをもとに、パート職員が調理して提供しています。次に、福祉学科のゼミ生や卒業生による、TFT（※先進国の肥満と途上国の飢餓の問題を同時に改善しようとするNPO法人「TABLE FOR TWO INTERNATIONAL」の取り組み。）やフェアトレード。彼女たちが主体となり生協店舗にて商品の販売を行いました。大学で学んだことを活かす取り組みです。他にも、旅行業務を学ぶ学生が携わった国内・海外旅行のポスターもあります。これは学生の将来

の夢に関連する取り組みです。そして、金城の生協学生委員会による「モノコト提案」のコーナーは、新学期や試験、就職活動などをテーマとして関連商品を販売しています。彼女たちは毎回それらのテーマについて議論し、学びあいながら売場の棚づくりをしています。また、最近の取り組みでは大学オリジナルトートバッグの制作と売り場づくりが行われました。大学院の授業の一環で行われた取り組みで、組合員へのアンケート調査で得たデータを基にバッグの形や色をオリジナルデザインしました。さらに、自分たちでポスターやチラシをつくったり、買ってくれた人に購入動機を調査してモノの流通について学ぶというものです。

店舗を舞台としたこれらの取り組みが、ただ商品を売っているだけではないということは以上の事例紹介で理解していただけたかと思います。これらの取り組みに共通するのは、『組合員の学びと成長』です。金城では生協店舗をステージとして学生や組合員による数多くの取り組みがなされています。学生たちは大学の講義でインプットした内容を、生協店舗というステージで具体的な取り組みを通してアウトプットしています。授業ノートではなく実際の店舗にアウトプットすることで、他の人の目にもふれて評価されます。店舗利用者のリアクション・評価が、その取り組みを行った学生たちにとってはさらなるインプットに繋がるのです。このように組合員が店舗活動に関わり、これら一連の流れを経験することで、大学生協の組合員としてよりいっそうの学びと成長を得るのです。

『組合員の参加で成長を支援する店舗』…これが大学生協にしかない強みだ！そう気づいた私は、そのように結論付けて卒業設計を仕上げました。組合員参加で成長支援する店舗づくりの取り組みに大切なのはソフト面の取り組みです。そして、それをサポートするためのハード面（建物・内装）の整備です。これらソフト面・ハード面の

両方がうまく機能しあったとき、理想の店舗ができあがると感じます。しかしこれは机上の空論で実現するのは難しいことだと思います。かといって、組合員参加で成長支援する店舗という理想は追求しなくていいのでしょうか。私の中で、もやもやが残りました。大学院生になった私は、高齢者の住まいの研究の最中、とある生協の福祉村づくりの取り組みに出会いました。そこでの取り組みの様子や村が出来上がるまでの経緯を聞き、「あれ？私が4年生の時に理想だと思っていた組合員参加で成長を支援する店舗って、あながち夢ではないかも！」と思えるようになりました。

●組合員が参加する、組合員主体の活動を

私が出会ったのは、南医療生協の生協「のんびり村」という複合型の福祉村です。研究の関係で昨年6月1カ月間住み込ませていただきました。この「のんびり村」が作られることとなったきっかけは組合員からの土地の提供でした。「ぜひ役立ててほしい」という土地提供者の思いから福祉村をつくることを決めたのです。そこで集まったのは、同じ地域に暮らす南医療生協の組合員でした。その土地に何をつくるかみんなで会議をして話し合いました。地域の組合員や医療生協の職員、設計事務所の担当者など、多くの方が会議に参加しました。建物づくりと並行して、地域の組合員が家々を一軒一軒まわり、施設の利用者と介護職員探しを行ったり、建築資材や家具の調達も行ったそうです。そして、建物の施工の一部や、仕上げも組合員が行ったのです。

多くの組合員の手により建てられた南医療生協の「のんびり村」、建物が完成したその後も組合員の協力は終わりません。村の喫茶店の経営は現在組合員のボランティアで、行っています。花壇の整備や、施設利用者の交流も組合員が率先して行っています。「のんびり村」は組合員の力によって支えられているのと同時に、「のんびり村」があることで地域の組合員には役割ができて、生き甲斐を感じているように思います。組合員みんなが暮らしをよくするために協力し合っている、その様子を自分の目で見て本当に衝撃をうけました。



▲ソフト×ハード＝理想の店舗

そんな南医療生協の専務の言葉で、とても印象に残っているものがあります。それは「協同組合は人が財産。南医療生協がやるのではなく、南医療生協でやる。」という言葉です。大学生協であれば、職員や学生委員が主体となって活動するのではなく、組合員が主体の活動を職員や学生委員が支援するということだと思います。

ここまでにご紹介した南医療生協の事例紹介をまとめます。村づくりを自分たちの手でゼロからすすめてきたため、組合員自身が組合員である自覚がとにかく強いです。組合員たちは自分たちが作った村に愛着を持っているため、何かあるときも何もないときも村に人が集まります。そしてもっとこうしたいと気持ちを持ち続けている…未完成でありつづけることで、よりよくしていくことができているのです。

●クレアチオの発足

これらの取り組みは大学生協でも実践できることなので、南医療生協の「のんびり村」のような取り組みが実現できたらいいなと思っていました。そう考えていたら、なんとチャンスがきました。大学が2012年からキャンパスリニューアルをすることが決定し、それにともない大学生協の食堂と購買が新しく建物の中に新築移転することとなったのです。このチャンスを逃してはいけない！南医療生協みたいに学生も、教職員も生協職員もみんなで力を合わせて自分たちの店づくりがしたい！そんな思いから出来上がったのがクレアチオという組織です。生協に関わるすべての人の架け橋となる学生組織です。クレアチオは昨年の5月から活動を始めました。現在登録メンバーは、学生組合員32名です。正式にメ



▲メンバーで お互いが思っていることを共有

ンバー登録はしていないけれど活動を手助けしてくれる方も数多くいます。

クレアチオは設計を行う店舗検討委員会を補佐し、店づくりのソフト面にも積極的に関わる学生組織として活動を行っています。名前の由来（CREATIOはラテン語で“創造”の意）にもありますが、店にまつわるすべてのものをゼロから創造してつくりあげるのが、この学生組織の想いであり目標です。私たちは新店舗づくりをきれいなハコづくりで終わらせないように、生協らしい店づくりを目指しています。そのためのポイントを以下にまとめます。まず、土台となる部分に組合員の積極的な参加や組合員の力が必要です。これが大学生協らしい店づくりの原動力になります。この土台となるのがクレアチオの役割の一つでもあります。その土台の上に乗ってくるのがソフト面の取り組みとハード面の整備です。ソフト面とは、金城でいえば学生による店舗活動の継続や強化です。それを助けるハード面の整備、つまりソフト面の取り組みを活性化させる機能が必要です。店づくりを建物づくりで終わらせない！ソフトもハードもみんな考えて愛着をもてる店を作ろう！そんな理想を追求して、クレアチオはそれらの土台となる取り組みを進めています。

●「みんな」でつくる 生協づくり

さきほどから「みんな」という言葉を多用していますが、ここで言うみんなとは金城学院大学生協に関わる全員のことで、学生や教職員組合員、生協職員その他の仲間たち、私たちはこれらの仲間とともに活動をしています。その、協力の具体例を4つご紹介していきます。

1つ目は学生組合員の協力です。店づくりをするにあたり、組合員の大半を占める学生の声は必須です。新店舗を考える前に、学生が既存店舗をどのように評価しているかを知る必要がある、そんな思いからアンケート調査を行いました。回答数はのべ900名でキャンパス人口の16.4%です。アンケートの配布はクレアチオのメンバーはもちろん、その友達や総代にも協力してもらいました。他にも、来年から導入されるICプリカのデザインも組合員と協力し合い考えました。組

合員から案を募り、デザインコンテストを開催しました。投票数は676票で、こうして集めた声をもとに完成デザインを仕上げました。



▲ICプリカのデザインコンテストの完成品

2つ目は教職員組合員の協力です。先生方の協力のおかげでクレアチオの勧誘ポスターの学内掲示が実現しました。普段は生協関連のポスターを学内に掲示することは禁止されていますが、それを乗り越えて掲示ができました。先生方はゼミや授業の時間でクレアチオの勧誘活動を行ってくださって、そのおかげで新たなメンバーを迎え入れることができました。金城には建築を専門としている先生が何名もいますので、その方たちから専門家ならではの意見もいただいています。

3つ目は他の仲間たちの協力です。他大学生協へ、何度か店舗見学に行かせて頂きました。金城学院大学の生協しか知らない私たちにとって、非日常の他大学生協店舗だからこそ気づく生協の良さや、想いをたくさん持ち帰ることができました。

最後は生協職員との協力です。先程ご紹介した大学生のアンケート調査の結果を職員ミーティングで共有して、お互いに新店舗に対して思っていることを、議論し合いました。それを踏まえ、新店舗づくりの前身となる既存店舗の改善を行

いました。学生からの報告を受け、パート職員は学生の声を反映して食堂のメニューの改善を行ってくれました。さらにその改善に感謝の意を込めて学生が新メニューのプライスカードを作るといった交流が続いています。また、基本的な挨拶は欠かさないようにして、信頼関係を築きあげています。

●お店に関わる様々な人を集めて

このようにソフト・ハードともに、たくさんの仲間たちと助け合って店づくりを進めています。なぜここまでこだわって店づくりを進めるのか？学生の学びと成長の手助けをするなら単発の企画でも十分ではないか？そうお考えの方もいらっしゃるかと思います。しかし、店舗を侮るなかれ！店舗というフィールドがいかに素晴らしいか、説明します。

店舗は毎日大勢の組合員が利用しますよね。組合員にとって、身近な場所です。そんな店舗には、大学内で必要とされるものが揃っています。店舗の中には商品について詳しい職員や、実際にその商品を購入し使いこなす学生たちがいます。また単発のイベント的な企画と違って、店舗では売り場を使って長期的に何度も提案が可能です。つまり、大学生協の店舗は『利用する側にも演出する側にもなれる最高のステージ』なのです！だからクレアチオは新店舗を盛り上げようと試行錯誤で取り組みを進めています。

新店舗づくりはみなさんの店舗でもできます。“新しい”というのは綺麗になるとか、最新の設備になるということだけではないと思うのです。一度、お店に関わる様々な人を集めて意見を交流しあってみてはいかがでしょうか。今の店舗についていろいろな意見が出てくると思います。今一度、店舗を見つめなおし、みんなのもっとこうしたいという想いをカタチにしましょう。どの生協でもできる取り組みです。新しい店舗のあり方を皆さんで作っていきませんか？

金城大生協の新店舗は、来年6月中旬、完成予定です。今も設計やソフト面の活動の真っ最中なので、継続してがんばっていきましょう。



▲生協 既存店舗調査アンケートの取り組み

《コメント》

5つの報告を聴いて

小木曾洋司

報告された事例についてのコメントをしていただきました（編集委員会）。

①「南生協よってって横丁」

協同組合資本による新しい生活空間の創出というイメージをもちました。規模が大きすぎて想像がむずかしいですが、大規模多機能施設ですから組合員にとっても周辺の地域社会にとっても大きな影響と役割を果たすことになるのは間違いないところです。先に述べました「小さな公」とは「大きな公」では満たされない必要、あるいはその限界を感じているために、編み出された形のものでした。ここでは「大きな公」と「小さな公」は対立関係にある側面があります。この「南生協よってって横丁」は、その両者の対立的側面を補完関係に組み直す工夫であるように思います。それは協同が私を基礎に公の機能を含みこもうとするアプローチだからできることです。逆では対立がおこりやすいわけです。そしてそのアプローチを実質化しているのが「100人」「1000人」「10万人」会議であると理解しました。

②大府市横根町での移動店舗と地域交流の取り組み

たいへん大きな出来事だと思います。広報車が先頭を走って地域の人たちに移動店舗が来たことを知らせてくれるということですが、時代を遡った昔の豆腐屋さんや魚屋さんが来ていた状況を思い浮かべてしまいます。同時に以前の共同購入状況もダブります。大事なことは買い物に来た人同士、職員の人と間でそこで会話がなされることです。二つのことを指摘します。第一は、移動店舗車という「お店」に、定期的にとくに高齢の方が出てくること、それは自分の生活のリズムをつくることです。買い物の予定があるということ

はその他の自分の生活の形と時間の使い方に流れをつくることになります。頭も体も使うことになります。生活の形があつてこそ、必要な品が「必要」として自覚でき、さらに、会話はその生活の形を変化させる契機になり、そこで新たな「必要」が生まれます。閉じこもっている人にいくらチラシを配っても「必要」が湧きあがってこない可能性が高いのではないのでしょうか。生活をサポートすることができるのは当事者の生活の形への拘りがあるからできることです。だから移動店舗は「必要」の形成を媒介に、地域の高齢者の生活に張りをもたらしめているかもしれません。このことをもっと一般化すれば、品物一つひとつがそれを買う人の生活を形作っているパーツになっているということです。購入とは生活づくりであり、その維持です。だから「品物を見て買いたい」のではないのでしょうか。単に値段、品質だけの問題ではないように思えます。

③「コープぎふ おたがいさま東部」

設立過程についての報告では、熱い思いが伝わってきました。この文章を書いている時点では、すでに「準備」ではなく、応援が開始されているはずですが、お話にもありましたが、まずは「くらしたすけあいの会」と「おたがいさま」とどう違うのか、と思いました。「くらしたすけあいの会」と変わらないという発言もありましたから、その再構築と捉えました。その際に、大切な視点は「地域のニーズをもっとよく知ること」ですが、これ自体大変なことです。ニーズは上記②大府市横根町での移動店舗と地域交流の取り組みに関して述べた「必要」ということです。簡単に、学生の求めるものを例に説明しますと、講義における学

生のつまんなさそうな顔から「勉強以外」のものを求めているのか「わかりたいのにわからないから」耐えているのか、という相反する「ニーズ」の解釈が可能なのです。どっちであるかは彼らと一緒に時間を過ごし、話すしかないのです。「おたがいさま」の場合は地域にこだわるところがそれに当たるのではないか。このプロセスが「自分をひらく」ことです。それも「おたがいさま」で、準備に当たっている佐藤さんたち自身が一番「自分をひらこう」としているのだと思います。自分たち自身をもう一度組み立て直そうという意気込みが伝わってきました。

④伊賀エリア会活動

地域社会への参加回路を模索している姿です。「地域社会とは」と問われて、答えに窮することは不思議ではないことが一般的ではないでしょうか。時代を遡れば、地域社会の関係や活動は具体的であり、実態として感じることができました。そういう社会ではなくなったから協同が必要になるという今の構造があります。今また協同組合が地域社会への参加回路を作ろうとするとはどういうことなのでしょう。エリア会の共通の取り組みとして消費者問題、ユニセフ活動があり、そして独自の地域課題に対する活動があります。それらの活動を通して、様々な社会問題に関わることができるということはありますが、「大きな公」に関わるのは「たいへん」かもしれません。なぜなら自分とのつながりを実感するには距離感があり、当事者性をもつことが難しいからだと考えられます。それとは少し違い地域社会への参加は、フェスティバルへの参加などです。こうした参加活動は「参加」「活動」という言葉で理解するものではなく、本来「楽しむ」ということです。だから地域社会への参加とは、地域社会にある様々な資源（行事や関係）を用いて生活の豊かさを組み立てる試みだと思います。そうした豊かさをつくることこそが協同の役割をさらに高めることにつながるようになるのではないのでしょうか。

⑤「みんなでつくろう新店舗～クレアチオの挑戦～」

金城学院大学生協の取り組みです。大学のキャンパスリニューアルに伴う生協の食堂、購買店舗の新築移転を組合員自身の店づくりの機会ととらえ、その中心になっているのがクレアチオという学生組織ということです。大学を自分たちの居場所と感じられるのはそこを日常的に使っていることだけでなく、その使い方の変更を自分たちの努力でできるからだと思います。しかしそれが難しくなっているのがここ近年の傾向です。それにともない、全国の大学生協も、学生生活の何を支えるのか、の開拓を迫られているように思います。なぜなら端的に「売れない」状況があるからです。これまでのコメントで述べてきましたように、「必要」、「ニーズ」が基本です。それは「生協は誰のもの？」という根本的な問いの別の表現です。藤井千明さんはこの基本を南医療生協の取り組みに学び、大学生協の店作りに取り組む組織としてクレアチオを組織したということだと思います。この組織の性格を正確に理解できていませんが、この組織が組合員による店づくりを支えているように考えられますので、その活動の経験を是非、他の大学生協の、特に学生委員会の学生に伝えてほしいと期待しています。大学生協が学生生活を支えるだけでなく、新しいつながりを創造することにつながる「ステージ」になることを願います。

◆



《編集後記》

「地域と協同」第2号は、第10回東海交流フォーラムを題材に編集しました。

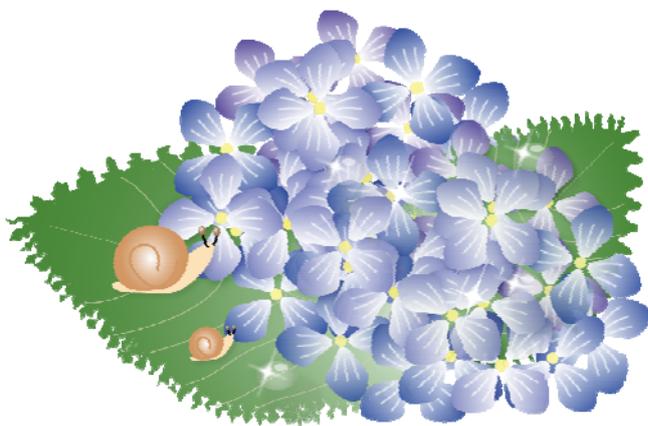
東海交流フォーラムを準備する実行委員会では、東海三県の地域、医療、大学生活が地域や大学に起こっている課題に住民や学生、自治会や社協などと協力してどう向かっているかを題材に報告テーマを選びました。基調報告では、そのような生活協同組合の実践を「大きな公」とすると、一人の住民としての個人がどう自分を開いて関わるかを「小さな公」として、その結びつきが大切であることが、提起されました。

本誌の編集にあたっては、東海交流フォーラムの基調報告と事例報告をその後の様子を補強して掲載しました。加えて基調報告で呼びかけられた個人と協同の関わりについては、参加者がそのあとどんな実践をしたかを振り返る座談会を企画しました。

協同組合は、地域から離れて活動できませんが、地域から遊離してきた個人の生活を、どう協同組合が地域に着地させることができるか、という新しい問いに対して、本号はそれなりの内容をもりこめたのではないかと、ふりかえています。

読者の皆さんに感想をお寄せいただき、さらにこのテーマを深めていきたいと思います。

(向井 忍)



編集委員

下里玉美 (コープあいち理事)
田所登代子 (コープあいち理事)
田中義二 (愛知書房・表現舎)
橋本吉広 (大学非常勤講師)
仲田伸輝 (常任理事)
渡邊 秀 (常任理事)
向井 忍 (専務理事)

【「地域と協同」の発刊について】

増刊・研究センターNEWS「地域と協同」は、地域と協同の研究センターの活動の広報だけでなく、東海地域の市民の協同と協同組合や会員の願い、要求などに関するテーマを持った、研究的な掘り下げを行う情報交換の場、そして、様々な市民や実践家、研究者の方の意見や問題提起が発信されるものを目指しています。
(2013年7月6日 理事会決定より)

2014年5月25日発行（不定期刊）

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター

代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 生協生活文化会館 2F

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail: AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

頒価 300円